京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2017-13

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇一七－一三

平安京右京七条一坊二・四・七・八町跡、御土居跡、堂ノ口町遺跡

平安京右京七条一坊二・四・七・八町跡、御土居跡、堂ノ口町遺跡

2018年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京七条一坊二・四・七・八町跡、御土居跡、堂ノ口町遺跡

2018年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、施設整備事業に伴う平安京跡、御土居跡、堂ノ口町遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

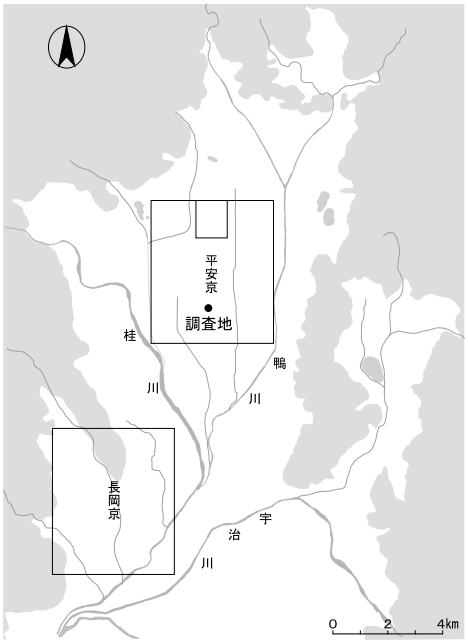
平成30年７月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	平安京跡、御土居跡、堂ノ口町遺跡　（京都市番号　15Ｈ394）
2	調査所在地	京都市下京区朱雀分木町26・38・80番地、朱雀堂ノ口町20－3
3	委　託　者	京都市　代表者　京都市長　門川大作
4	調 査 期 間	2016年５月９日～2017年７月27日
5	調 査 面 積	4,352㎡
6	調査担当者	柏田有香・金島惠一・東　洋一・津々池惣一・後川恵太郎・松本啓子・三宮昌弘・合田幸美
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「島原」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	調査区ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
13	本 書 作 成	柏田有香・後川恵太郎・金島惠一
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
２．位置と環境 …… 5
（１）遺跡の位置と環境 …… 5
（２）既往の調査 …… 5
３．遺　　構 …… 9
（１）Ａ区の遺構 …… 9
（２）Ｂ区の遺構 …… 10
（３）Ｃ区の遺構 …… 11
（４）Ｄ区の遺構 …… 13
（５）Ｅ区の遺構 …… 13
４．遺　　物 …… 15
（１）遺物の概要 …… 15
（２）土器類 …… 15
（３）瓦類 …… 16
（４）木製品 …… 16
（５）その他の遺物 …… 17
５．ま と め …… 19

図　版　目　次

図版１　遺構　Ａ区平面図（１：250）
図版２　遺構　Ａ区断面図（１：100）
図版３　遺構　Ｂ区平面図（１：400）
図版４　遺構　Ｂ区断面図（１：100）
図版５　遺構　Ｂ区拡大平面図（１：150）
図版６　遺構　Ｃ区第１面平面図（１：300）
図版７　遺構　Ｃ区第２面平面図（１：300）
図版８　遺構　Ｃ区西壁・南壁断面図（１：100）
図版９　遺構　Ｃ区土坑列１・２、土坑130実測図（１：100）

図版10　遺構　Ｃ区掘立柱建物１、柱穴75・95実測図（１：80）
図版11　遺構　Ｄ区実測図（１：100）
図版12　遺構　Ｅ区実測図（１：100）
図版13　遺構　Ｅ区井戸14・15、ピット列実測図（１：40）
図版14　遺物　土器実測図、瓦拓影及び実測図（１：４）
図版15　遺物　木製品実測図１（１：２）
図版16　遺物　木製品実測図２（１：４）
図版17　遺構　１　Ａ区東調査区全景（北東から）
　　２　Ａ区西調査区西半全景（東から）
　　３　Ａ区西調査区東半全景（西から）
図版18　遺構　１　Ｂ区全景（北東から）
　　２　Ｂ区南端部全景（北から）
図版19　遺構　１　Ｃ区西半南全景（北から）
　　２　Ｃ区西半北全景（北から）
図版20　遺構　１　Ｃ区東半全景（南南西から）
　　２　Ｃ区北端全景（西から）
　　３　Ｃ区濠298（北から）
図版21　遺構　１　Ｃ区濠298（北から）
　　２　Ｃ区濠298出土編籠
　　３　Ｃ区土坑130（西から）
　　４　Ｃ区掘立柱建物１（東から）
図版22　遺構　１　Ｅ区全景（北東から）
　　２　Ｅ区井戸15（北東から）
　　３　Ｄ区西調査区全景（東から）
図版23　遺物　土器類・瓦類・鉄滓
図版24　遺物　木製品

挿　図　目　次

図１　調査地と周辺調査位置図（１：5,000）　……　1
図２　調査区配置図（１：2,000）　……　2
図３　Ａ区西半調査前全景（西南西から）　……　3
図４　Ａ区東半調査前全景（西から）　……　3
図５　Ｂ区調査前全景（南東から）　……　3
図６　Ｃ区調査前全景（南から）　……　3
図７　Ｅ区調査前全景（南から）　……　3
図８　Ｂ区作業風景　……　3
図９　Ｃ区濠298断面図（１：40）　……　12

表　目　次

表１　調査区一覧表　……　4
表２　周辺既往調査一覧表　……　6
表３　遺構概要表　……　9
表４　遺物概要表　……　15

平安京右京七条一坊二・四・七・八町跡、御土居跡、堂ノ口町遺跡

1．調査経過

今回の調査は、京都市中央卸売市場第一市場施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査である。京都市中央卸売市場第一市場（以下「中央市場」という。）は、北は五条通、南は七条通、東は坊城通、西は七本松通の間に施設が点在する。この範囲に含まれる遺跡としては、平安京の右京七条一

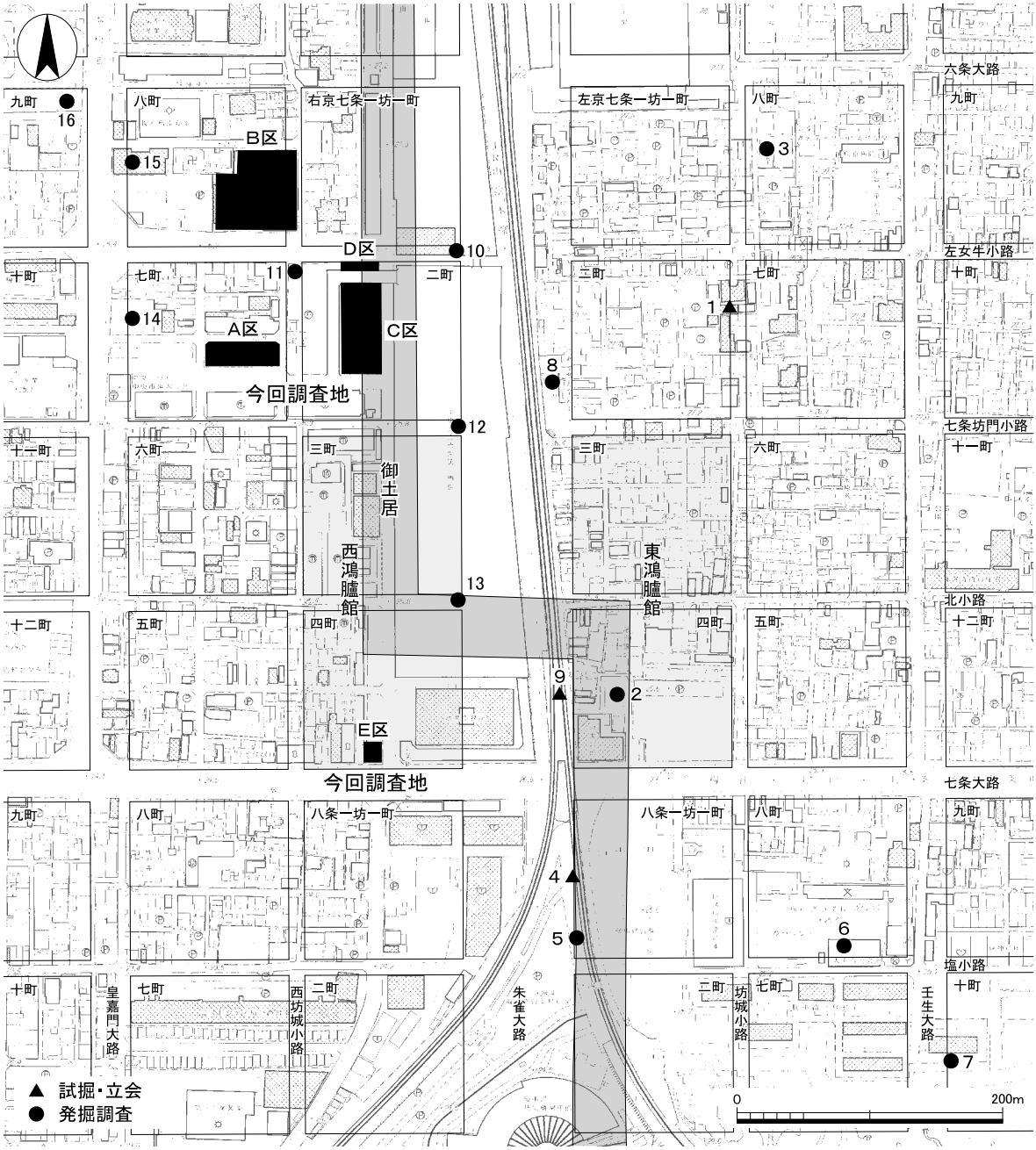


図１　調査地と周辺調査位置図（１：5,000）

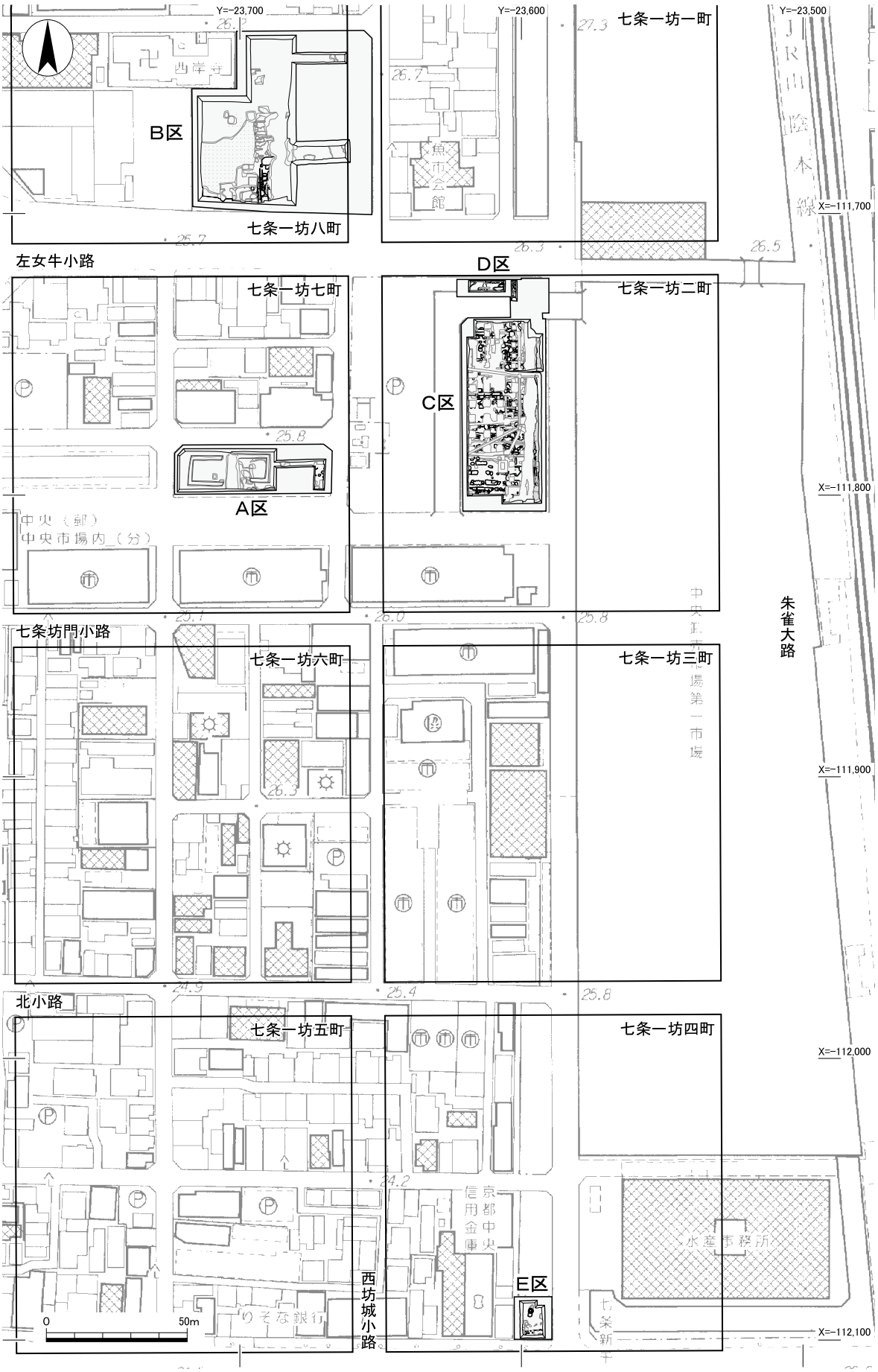


図２　調査区配置図（１：2,000）

図３　Ａ区西半調査前全景（西南西から）

図４　Ａ区東半調査前全景（西から）

図５　Ｂ区調査前全景（南東から）

図６　Ｃ区調査前全景（南から）

図７　Ｅ区調査前全景（南から）

図８　Ｂ区作業風景

坊の東半、朱雀大路、左京七条一坊の西半、豊臣秀吉が築造した御土居跡、弥生時代から奈良時代の遺構・遺物が出土する堂ノ口町遺跡がある。

調査は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の指導のもと、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。調査地は５地区に分かれ、さらに掘削土の仮置き場を確保するため、それぞれを細分して調査を行った。本報告では、煩雑さを避けるため同区画の調査についてはまとめ、調査を開始した順にＡ区からＥ区として報告する。各調査区の調査期間・面積・担当者は表１にまとめた。

調査では、朱雀大路に面した右京域の土地利用の在り方を明らかにすることを目的とし、特にＥ

表１　調査区一覧表

地区	調査期間	面積	担当者
A区	2016.5.9～5.26、2016.11.21～12.27	605㎡	柏田有香・後川恵太郎
B区	2016.6.1～7.5、2016.12.1～2017.1.26	1,897㎡	柏田有香・後川恵太郎・東 洋一・ 金島惠一・松本啓子
C区	2016.7.29～12.7、2017.3.8～6.14	1,666㎡	東　洋一・金島惠一・津々池惣一・ 後川恵太郎・三宮昌弘・合田幸美
D区	2017.2.8～2.24	68㎡	東　洋一・金島惠一
E区	2017.7.4～7.27	116㎡	津々池惣一・金島惠一

区が所在する右京七条一坊四町跡は平安京の西鴻臚館跡とされることから、鴻臚館に関連する遺構の検出が期待された。また、御土居跡の痕跡並びに奈良時代以前の堂ノ口町遺跡に関する遺構・遺物の検出も期待された。

調査の結果、Ａ・Ｂ・Ｄ区では近現代の攪乱による削平が著しく、遺構面の遺存状況が悪かったが、Ｃ・Ｅ区では平安時代から鎌倉時代の柱穴や井戸などを検出した。また、Ｃ区では御土居の濠の一部を検出した。

Ｃ区調査中には、京都市考古資料館主催の現地講座を開催し、成果の公表に努めた。また、調査中には検証委員の龍谷大学の國下多美樹氏、同志社大学の若林邦彦氏による検証を受けた。

２．位置と環境

（１）遺跡の位置と環境

調査地である京都市中央市場は、ＪＲ丹波口駅の南側一帯、北を五条通、南を七条通、東を坊城通、西を七本松通に囲まれた範囲に主要な施設が配置されている。この一帯は、完新世に形成された鴨川扇状地帯の段丘面で、縄文時代晩期頃に比較的安定した地形面が形成されたとみられ、遺構が出現しはじめる[1)]。周辺調査では、弥生時代から奈良時代の自然流路も多数見つかっており、それら流路間の微高地上に集落が形成されたと考えられる。後世の削平によるためか、住居跡などの明確な遺構は見つかっていないが、流路などから弥生時代前期から奈良時代の土器が出土する他、弥生時代中期の方形周溝墓の可能性がある溝なども見つかっている（図１－調査２）。

平安時代になると、中央市場の範囲は、平安京右京七条一坊と左京七条一坊の宅地となり、その間には南北に朱雀大路がはしる。朱雀大路に面した左右各一坊には平安京内でも特に重要な施設が置かれたとされる。今回の調査地は５地区に分かれるが、すべて右京七条一坊に位置する。中でも、Ｅ区が位置する七条一坊四町とその北側の三町の南北２町には、『拾芥抄』西京図によると、西鴻臚館が存在した。鴻臚館とは外国の使節を接待するための迎賓館であり、左右両京に置かれた[2)]。外国使節とは事実上、渤海国使のことを指す。東鴻臚館が承和六年（839）に廃止されて以降は西鴻臚館だけが残り、鎌倉時代まで存続した。しかし、平安時代後期には西鴻臚館も縮小して三町のみとなり、四町は和徳門院義子内親王（1234～1290）の所領となった（『拾芥抄』西京図）。その他の調査区が所在する町の伝領などは不明であるが、周辺調査成果から見ると、条坊側溝は整備されるものの、平安時代前期の一時期を除いて、宅地としての活用は希薄であったようである。中世以降は耕作地として利用されたようで、中世から近世の耕作溝が多数見つかっている。

また、桃山時代には、豊臣秀吉によって御土居が築かれる。中央市場の敷地内では、千本通の西側を南北に走り、七条通の北側で東にカギ状に折れる。この折れの箇所に丹波街道と接続する御土居七口の一つ「丹波口」があった。今回調査地がある中央市場西半は御土居の外、洛外であり、近世を通じて耕作地となっていたことが周辺調査成果からもわかる。御土居の濠が完全に埋められたのは明治時代に入ってからで、その後、御土居部分も耕作地となるが、昭和２年（1927）に京都市中央卸売市場が開設され、現在に至る。

（２）既往の調査（図１、表２）

調査１（2000年度試掘調査）　南北溝２条が検出されており、坊城小路の推定位置に該当するが、両溝の間隔が６ｍしかないことや、出土遺物が平安時代後期であることから、坊城小路には関連しないとみられている。

調査２（2009年度発掘調査）　平安時代から鎌倉時代の柱穴・井戸などの他、御土居基底部の盛土を検出している。また、弥生時代中期の方形周溝墓の可能性がある溝が検出されている。

表２　周辺既往調査一覧表

No.	遺跡名	方法	所在地	遺　構	遺　物	文献
1	左京七条一坊二町	試掘	下京区西新屋敷上之町128	平安時代後期の南北溝、小土坑。	平安時代後期の土師器、瓦器、軒瓦、瓦。	1
2	左京七条一坊四町・御土居跡	発掘	下京区朱雀正会町1-20	弥生時代の方形周溝墓か。平安時代～鎌倉時代の溝、井戸、土坑、柱穴。桃山時代の御土居基底部の盛土層。江戸時代の土坑。	弥生土器(前・中期)。平安～鎌倉時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、軒瓦、丸瓦、平瓦。室町時代の土師器、瓦器、輸入陶磁器。江戸時代の土師質陶器、陶磁器、桟瓦。近代の陶磁器。	2
3	左京七条一坊八町	発掘	下京区西新屋敷中之町103-2	弥生時代前期の流路。中世の小溝。江戸時代～近代の井戸、穴蔵、土坑、柱穴、溝、池状泥土堆積。	弥生土器(前期の壷・甕)。平安時代の緑釉陶器、平瓦。江戸時代の土師器、陶器、磁器、銭貨、金属製品。近代の陶器、磁器、金属製品。	3
4	左京八条一坊一町・御土居跡	試掘	下京区観喜寺町	江戸時代の濠。	江戸時代の磁器。	4
5	左京八条一坊一町・御土居跡	発掘	下京区観喜寺町	江戸時代～明治の濠。	江戸時代～明治の陶器、白磁、染付。	5
6	左京八条一坊八町	発掘	下京区歓喜寺町3	平安時代の井戸。鎌倉時代の土坑。室町時代の井戸。近世の土取り穴。	平安時代の土師器、須恵器、瓦器、白磁。鎌倉時代の土師器、青磁、白磁、鉄彩 。室町時代の土師器、焼締陶器。江戸時代の陶器、染付。	6
7	左京八条一坊十町	発掘	下京区観喜寺町	平安時代前期～中期の壬生大路東側溝、土坑。近世の溝、土坑。	弥生土器(後期)。古墳時代中期の須恵器、土師器。平安時代前期～中期の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、石帯。江戸時代の染付、施釉陶器。	7
8	朱雀大路	発掘	下京区揚屋町	中世～近世の溝、江戸時代末期の堀。	中世の土師器、須恵器、瓦類。江戸時代～明治の土師器、施釉陶器、焼締陶器、土製品、染付、青磁、木製品、金属製品。	8
9	朱雀大路	立会	下京区朱雀正会町	地表下2m以下に近世の遺物包含層。	江戸時代の陶磁器。	8
10	右京七条一坊一町	発掘	下京区朱雀分木町(中央市場)	平安時代後期の左女牛小路西側溝、朱雀大路西側溝。江戸時代後期の土取り穴。	平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、白磁、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦。	9
11	右京七条一坊二町・西坊城小路	発掘	下京区朱雀分木町(中央市場)	平安時代の西坊城小路東側溝、柱穴。安土桃山時代の土坑。江戸時代の土坑。時期不明の柱穴。	平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、中国製磁器、獣骨。平安時代～鎌倉時代の温石。鎌倉時代～室町時代の土師器、須恵器、瓦器、中国製磁器。江戸時代の磁器、施釉陶器、鉄釘。	10
12	右京七条一坊二・三町	発掘	下京区朱雀分木町(中央市場)	古墳時代～奈良時代の流路。平安時代の朱雀大路西側溝、路面、七条坊門小路北側溝。鎌倉時代の建物。近世の井戸、溝、御土居濠。	古墳時代の土師器、須恵器。奈良時代の土師器、須恵器。平安時代の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦類、銅銭、人形、輸入陶磁器(長沙窯)。	11
13	右京七条一坊四町	発掘	下京区朱雀堂ノ口町(中央市場)	平安時代前期の溝。平安時代中期～後期の朱雀大路西側溝。平安時代後期～鎌倉時代の溝、柱跡多数、土坑、井戸、柵列。室町時代の溝。桃山時代の御土居。桃山時代～江戸時代の御土居濠、溝。江戸時代～近代の土坑、溝、井戸多数。	縄文土器(中期の深鉢)。弥生土器(前期の鉢・壷)、石包丁。古墳時代の土師器(甕・壷・高杯)。平安時代以降の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、軒瓦、文字瓦、瓦、輸入陶磁器、銭貨、金属製品、木製品、石製品。近代の人骨、獣骨。	12
14	右京七条一坊七町	発掘	下京区朱雀分木町60(中央市場)	弥生時代～古墳時代の流路、土坑。平安時代の皇嘉門大路東側溝、築地跡、内溝、中世～近世の耕作溝、近世の土坑。	縄文時代の石鏃。弥生土器。古墳時代の須恵器。平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、土馬、丸瓦、平瓦、銭貨、獣骨、種子。	13
15	右京七条一坊八町	発掘	下京区朱雀分木町47	平安時代前期の皇嘉門大路東側溝、築地溝、掘立柱建物。室町時代の土坑。	平安時代前期の土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦、輸入陶磁器。	14
16	右京七条一坊九町	発掘	下京区中堂寺粟田町93・94	時期不明の流路。鎌倉・室町時代の六条大路路面。近・現代の溝、土坑、湿地。	平安時代の土師器、須恵器、軒丸瓦、丸瓦、平瓦。鎌倉・室町時代の土師器、瓦器。近・現代の陶磁器。	15

調査３（2000年度発掘調査）　平安時代の遺構は確認されなかったが、弥生時代前期の流路を検出している。

調査４（2006年度試掘調査）　御土居濠の東肩部と考えられる江戸時代の濠が検出されている。御土居濠の規模は、東西幅約14ｍ、深さ1.8ｍ以上と推定された。

調査５（2006年度発掘調査）　御土居濠の西肩部にあたる江戸時代から明治時代の濠が検出されている。御土居濠が最終的に埋没したのは、山陰線が敷設された時期であるとみられる。

調査６（1986年度発掘調査）　近世の土取り穴のため遺構の遺存状況は良くなかったが、平安時代の井戸や鎌倉時代の土坑が検出されている。また、平安時代から鎌倉時代の輸入陶磁器が比較的多く出土している。

調査７（1982年度発掘調査）　壬生大路東側溝と推定される平安時代前期から中期の溝が検出されている。弥生時代後期と古墳時代中期の土器が出土していることも注目される。

調査８（1976年度発掘調査）　朱雀大路跡にあたる。江戸時代末期の濠を検出している。御土居濠の一部と考えられる。

調査９（1975年度立会調査）　朱雀大路跡にあたる。地表下２ｍまで、御土居濠の埋土と思われる近世の遺物包含層を検出している。平安時代の遺構は削平されたと考えられる。

調査10（1986年度発掘調査）　左女牛小路の両側溝と推定される平安時代後期の東西方向の溝２条、朱雀大路の西側溝と推測される南北方向の溝１条が検出されている。

調査11（2007年度発掘調査）　西坊城小路東側溝と推定される平安時代の南北方向の溝や柱穴などが検出されている。

調査12（1984年度発掘調査）　朱雀大路西側溝と推定される平安時代の南北溝と路面、七条坊門小路北側溝と推定される東西溝が検出されている。朱雀大路側溝が七条坊門小路を横切る部分では、杭と矢板を使用した護岸施設を確認した。溝から出土した多量の瓦は、西鴻臚館に関するものとみられる。近世の御土居濠も見つかっている。また、古墳時代前期から奈良時代後期にかけての自然流路が検出され、堂ノ口町遺跡として周知されることとなった。

調査13（1982年度発掘調査）　平安時代中期から後期の朱雀大路西側溝が南北140ｍにわたって検出された。西鴻臚館の推定地にあたり、溝から出土した瓦の大半が搬入瓦であったことが注目された。桃山時代の御土居の盛土や濠も検出されている。

調査14（2016年度発掘調査）　皇嘉門大路の東側溝と推定される平安時代の溝、築地基底部、内溝が検出されている。弥生時代から古墳時代の流路も見つかっている。

調査15（1983年度発掘調査）　皇嘉門大路の東側溝と推定される平安時代前期の南北方向の溝２条や掘立柱建物３棟が検出された。

調査16（2005年度発掘調査）　鎌倉時代から室町時代の六条大路路面が検出されている。

註

1） 河角龍典「歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化－遺跡に記録された災害情報を用いた水害史の再構築－」『京都歴史災害研究』第１号　2004年

2） 鴻臚館については、角田文衛「平安京の鴻臚館」『古代文化』第42巻第8号1980年と山田邦和「第三章左京と右京」『平安京提要』角川書店1994年を参考にした。

文献一覧（表２　周辺既往調査一覧表）

1） 長谷川行孝「平安京左京七条一坊二町跡」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成12年度』 京都市文化市民局　2001年

2） 小檜山一良・尾藤徳行『平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009－1　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2009年

3） 永田宗秀・藤村敏之「平安京左京七条一坊」『平成12年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2003年

4） 吉村正親「平安京左京八条一坊一町跡・御土居２」『平安京跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006－18　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2007年

5） 津々池惣一「平安京左京八条一坊一町跡・御土居１」『平安京跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006－18　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2007年

6） 平尾政幸「平安京左京八条一坊」『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1989年

7） 磯部　勝「左京八条一坊」『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1984年

8） 『平安京跡発掘調査報告－山陰線高架建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告』山陰線高架化に伴う埋蔵文化財発掘調査団　1976年

9） 平尾政幸・加納敬二「平安京右京七条一坊」『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1989年

10） 内田好昭・加納敬二「平安京右京七条一坊二町跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007－6　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2007年

11） 平尾政幸・本　弥八郎「平安京右京七条一坊」『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1987年

12） 平田　泰・吉川義彦・菅田　薫「右京七条一坊」『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1984年

13） 東　洋一・柏田有香『平安京右京七条一坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016－2　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2016年

14） 本　弥八郎・菅田　薫「右京七条一坊」『平安京跡発掘調査概報　昭和58年度』 京都市文化観光局　1984年

15） 平尾政幸『平安京右京七条一坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005－12　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2006年

３．遺　　構

（１）Ａ区の遺構

１）基本層序（図版２）

調査地は、調査前まで西側は駐車場、東側はゴミ集積場として利用されており、現地表面の標高は25.3～25.6ｍでほぼ平坦であった。東調査区は、地表下0.45～0.8ｍまでが現代盛土で、その直下が基盤層となり、その上面で遺構を検出した。基盤層の検出標高は24.6～24.9ｍである。基盤層は大別すると３層に分かれ、上層から黒褐色と暗褐色の土壌化層（図版２－11・12層）、にぶい黄褐色の粘質シルト層（13層）、旧河川の堆積物と考えられる砂礫層（14層）の順に堆積する。

西調査区は、駐車場以前に中央市場の関連棟が存在し、その解体時の攪乱が地表下0.8～2.2ｍまで及ぶ。基盤層の検出標高は23.4～24.5ｍで、東調査区の基盤層上面の標高から見ても、遺構面は大きく削平されたと考えられる。南東部にわずかに土壌化層が残るが、遺構は検出できなかった。

２）遺構（図版１・17）

遺構は、すべて東調査区の東半で検出した。小規模なピット、土坑がある。

ピット10～14　平面円形で、径0.2～0.4ｍ、深さは0.05～0.2ｍある。いずれも土師器の小片が出土した。平安時代のものと考えられる。

土坑３・４・７　土坑は３基検出した。土坑３・４は東壁際で検出し、東半は調査区外へのびる。土坑３は平面円形で、検出長は東西0.3ｍ、南北0.6ｍ、深さは0.25ｍある。土坑４は、平面不整形で、検出長は東西1.0ｍ、南北1.4ｍ、深さは0.3ｍある。土坑７は平面不整形で、東西0.95ｍ、南北0.8ｍ、深さは0.1ｍある。土坑３・４からは鎌倉時代の遺物が出土した。

表３　遺構概要表

時　代	遺　　構				
	Ａ区	Ｂ区	Ｃ区	Ｄ区	Ｅ区
平安時代	ピット10～14	土坑28	掘立柱建物１、柱穴75・95、土坑135		
鎌倉時代～室町時代	土坑３・４・７	溝26・27、土坑５・11・14・15・29			井戸14・15、ピット列１～３
桃山時代			濠298		
江戸時代		溝１～３、土坑13・18～20・23	溝229、土坑群（土坑列１・２、土坑70・130含む）	土坑群１～３	

（２）Ｂ区の遺構

１）基本層序（図版４）

調査地は、調査前まで駐車場として使用されていた。現地表面の標高は25.5～26.5ｍで敷地中央部が高くなるが、調査の結果、これは現代盛土に拠ることが判明した。駐車場以前に大規模な建物が存在し、その解体時の攪乱が地表下0.6～2.0ｍ以上まで及ぶ。一部では旧建物のコンクリート基礎がそのまま残置されていた。調査区西半は全面調査を行ったが、遺構面が遺存していたのは南半の一部のみであった。遺構面が遺存している部分では、地表下0.5～0.8ｍまでが現代盛土、南端ではその下に中世の遺物包含層が0.03～0.05ｍ堆積する（図版４－３層）。この遺物包含層を除去すると基盤層となる（６～８層）。遺構を検出した部分の基盤層上面の標高は25.0～25.15ｍである。遺物包含層上面を第１面、基盤層上面を第２面として調査を行った。

調査区東半については、西半の調査成果や旧建物の配置図を検討した結果、旧建物解体時の攪乱が全域に及んでいることが想定されたため、文化財保護課の指導により、北半と南半に拡張区を設定し、遺構面の有無を確認することとなった。その結果、拡張区１・２ともに、解体時の攪乱が地表下1.1～3.0ｍ以上まで及ぶことが判明した。拡張区１では東半で基盤層がわずかに高く残る部分を検出した（図版４－９・10層）が、遺構は確認できなかった。上面の標高は24.8ｍである。拡張区２では、西端と東半の一部で基盤層が残る部分を検出した（12・13層）が、遺構は確認できなかった。上面の標高は23.9～24.8ｍである。

２）遺構（図版３・５・18）

第１面の遺構（図版５）

室町時代後半（16世紀）の遺物包含層の上面で検出した遺構群である。溝、土坑、ピットなどがある。

溝１～３　南北方向の溝である。溝１は、検出長11.0ｍ、幅0.35ｍ、深さは0.05ｍある。溝２は、検出長7.5ｍ、幅0.3ｍ、深さは0.05ｍある。溝３は、検出長1.15ｍ、幅0.25ｍ、深さは0.03ｍある。いずれも19世紀代の遺物が出土した。耕作溝の可能性がある。

土坑13・18～20・23　平面形が不整形な土坑群である。19世紀代の遺物が出土した。いずれの土坑も、底面が砂礫層で止まっていることから、土取り穴の可能性がある。土坑13は検出長が東西3.5ｍ、南北2.0ｍで、深さは約0.15ｍある。土坑18は検出長が東西1.5ｍ、南北1.0ｍで、深さは約0.3ｍある。土坑19は検出長が東西1.5ｍ、南北1.5ｍで、深さは約0.15ｍある。土坑20は検出長が東西2.0ｍ、南北2.0ｍで、深さは約0.2ｍある。土坑23は検出長が東西4.5ｍ、南北3.0ｍで。深さは約0.15ｍある。

第２面の遺構（図版５）

基盤層上面で検出した遺構群である。溝、土坑、ピットなどがある。

溝26・27　南北方向の溝である。溝26は、検出長9.5ｍ、幅0.3～0.4ｍ、深さは約0.1ｍある。溝27は、検出長3.0ｍ、幅0.25～0.4ｍ、深さは約0.1ｍある。

土坑５・11・14・15・29　平面形が不正形な土坑群である。16世紀前葉から中葉の遺物が出土した。土坑５は検出長が南北5.05ｍ、東西1.5ｍで、深さは約0.5ｍある。土坑11は検出長が東西2.5ｍ、南北3.0ｍで、深さは約0.3ｍある。土坑14は検出長東西1.25ｍ、南北1.5ｍで、深さは約0.35ｍある。土坑15は検出長東西0.75ｍ、南北3.4ｍで、深さは約0.3ｍある。土坑29は検出長が東西1.6ｍ、南北1.5ｍで、深さは約0.1ｍある。

土坑28　平面形が不整形で中央部がやや深くなる土坑である。検出長は、東西2.45ｍ、南北2.4ｍで、深さは約0.2ｍある。埋土から平安時代前期（９世紀後半から末頃）の土器類や瓦類が出土した。

（３）Ｃ区の遺構

１）基本層序（図版８）

調査地は、中央市場の中央駐車場として調査直前まで使用されていた場所である。現地表面の標高は北側約25.7ｍ、南側約25.7ｍでほぼ平坦である。

基本層序は、現地表面から0.7～1.0ｍが現代造成土で、現代造成土および部分的に遺存する近代耕作土（図版８－１層）を除去すると基盤層が露出する。基盤層は黄褐色の砂泥を主体とする（12層）。基盤層上面の標高は、調査区北側約25.0ｍ、南側約24.9ｍで、ほぼ平坦な遺構面である。黄褐色砂泥の基盤層の下位には、砂礫層が1.0ｍ以上堆積する。なお、御土居の濠を検出した調査区東側は、近代以降の造成土と近代の耕作土が一部遺存しており、その直下に濠埋土が堆積する。

遺構は全て基盤層上面で検出したが、遺構の帰属時期により、中世以降の遺構群を第１面、平安時代の遺構群を第２面として報告する。

２）遺構（図版６・７・９・10・19～21）

第１面の遺構（図版６）

濠298（図９、図版20・21）　調査区東端で南北方向にのびる御土居濠の西肩部を検出した。検出長約59.0ｍ、検出幅は1.2～3.2ｍある。埋土は大別３層に分かれる。下層は、基盤層由来の偽礫を含む砂泥でブロック土である（11・12層）。この層と基盤層では、水成層の極細砂～細砂を挟在する（13層）。中層は、湿性堆積物の泥砂で、部分的に水成層の砂層を挟む。調査区南側では、砂層を挟在せず泥質となる。上層は、中砂から極粗砂を主体とした水成層の砂層で、調査区の南側に向かって細粒化し泥質となる。砂層上位は、泥の薄層を挟在しており、泥層から木製品、牛骨、ヒシ及びウリ科の種実などが出土した。上層埋土の上には、江戸時代後期末から近代の遺物を含むブロック土（５層）と、近代の耕作土が堆積する（３層）ことから、濠298は近代になって人為的に埋め戻され、その後水田ないし畑として用いられたと考えられる。西肩部では近代耕作土の下面で南北方向の溝229を検出した。検出長約12.5ｍ、幅約0.3ｍ、深さは約0.05ｍある。

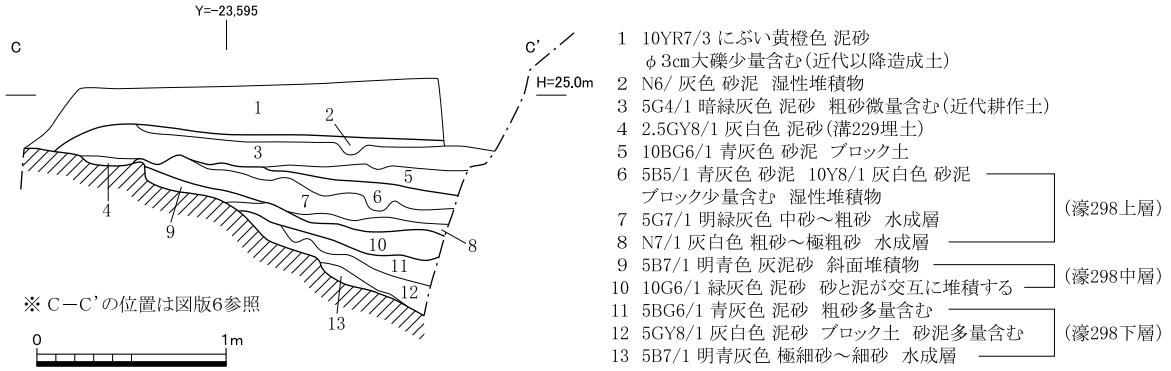


図９　Ｃ区濠298断面図（１：40）

土坑列１・２、土坑130（図版９・21）　調査区全域で、土取り穴と考えられる土坑群を検出した。出土遺物は平安時代から江戸時代までの時期幅をもつが、周辺調査事例や少量ではあるが近世遺物を含むことから、すべて江戸時代に入って掘削されたものと考えられる。平面形は不整形なものが多いが、東西に長い長方形を指向する土坑もある。特徴的なものを以下に挙げる。

土坑列１・２は調査区南端で検出した。東西に連なる土坑列が幅約0.8ｍの間隔を開けて平行に並ぶ。この間が小径あるいは畔で、その両側を掘削したものと考えられる。

土坑130は調査区中央北寄りで検出した。平面形は東西に長い長方形で、断面形は台形状を呈する。平安時代から鎌倉時代の土器がややまとまって出土した。

第２面の遺構（図版７）

掘立柱建物１（図版10・21）　調査区南端で検出した梁行２間、桁行３間以上を想定した東西棟の掘立柱建物である。方位は北に対して２度西に振れる。柱間は2.1〜2.3ｍである。北側の桁行を構成する柱穴のみ柱掘形の平面形を検出した。掘形の平面形は隅丸方形ないしは方形を呈し、一辺0.6〜1.0ｍ、深さは0.05〜0.3ｍある。柱痕から推測される柱径は0.25〜0.3ｍある。南側は、後世の土坑による削平が著しく、柱穴93・96で柱痕ないし抜取り穴に相当する部分のみを確認した。柱穴28・29から土師器が出土した。細片であるため、詳細な時期比定は困難だが、平安時代前期のものと考えられる。

柱穴75・95（図版10）　調査区中央部で検出した柱穴である。ほぼ正方位に南北に２基が並ぶが、周囲を含め近世以降の土坑による攪乱が著しく、同一の建物を構成する柱穴であるかは不明である。柱穴75は、掘形の平面形は歪な隅丸方形で、一辺0.4〜0.5ｍ、深さは約0.2ｍある。柱痕から推測される柱径は約0.2ｍある。柱穴95は、平面形は隅丸方形で、一辺約0.4ｍ、深さは約0.05ｍある。柱痕から推測される柱径は約0.2ｍある。

土坑135　調査区北半で検出した。平面形は隅丸方形で、東西約1.1ｍ、南北約1.0ｍ、深さは約0.3ｍある。埋土は砂泥である。平安時代前期の土師器細片が出土した。

（４）Ｄ区の遺構

１）基本層序（図版11）

調査地は、調査前まで駐車場として使用されていた。現地表面の標高は25.7～25.8ｍでほぼ平坦である。地表下0.6～1.0ｍまでが現代盛土、西調査区西端と東調査区ではその下に近世以降の耕作土が0.05～0.2ｍ堆積する（図版11－Ａ・Ｂライン１層、Ｃライン１・２層）。それ以外では、現代盛土直下が基盤層、もしくは近世の土坑の埋土となる。基盤層の検出標高は25.0ｍである。遺構は全て基盤層上面で検出した。西調査区西半では、遺物を含まない縄文時代以前の自然流路と考えられる堆積を確認した（Ａ・Ｂライン16～20層）。

２）遺構（図版11・22）

土坑群１～３　東調査区、西調査区ともに土取り穴と考えられる土坑群１～３を検出した。ほぼ全域で土坑を検出したが、西調査区の土坑群１と土坑群２の間では土坑が確認できなかった。この部分は先述したように自然流路の砂礫が堆積している部分であり、砂礫を避けて周辺の粘土層を掘削した結果と考えられる。土坑群１～３を構成する土坑は、いずれも平面形が不整形で、深さは0.1～0.4ｍある。埋土からは江戸時代（17世紀から18世紀中葉）の遺物が出土した。

（５）Ｅ区の遺構

１）基本層序（図版12）

調査地は、調査直前まで中央市場の七条警備室とトイレの建物が存在し、それらを解体後に調査を開始した。現地表面の標高は、24.8～25.3ｍで北がやや高い。地表下0.5～1.4ｍまで建物解体時に伴う現代造成土で、その下に中世から近世の遺物包含層が堆積する（図版12－４～７層）。遺物包含層は、調査地北東部では約0.8ｍの厚さで堆積することを断面で確認したが、それ以外は建物建設もしくは解体時に大きく削平を受け、0.1～0.2ｍ程度残存するのみであった。遺物包含層を除去すると黄褐色砂泥の基盤層となる（８層）。基盤層上面の標高は23.6～24.1ｍである。遺構はすべて基盤層上面で検出した。

２）遺構（図版12・13・22）

井戸14（図版13）　調査区北半で検出した。井戸15に削平される。掘形の平面形は隅丸方形で、東西約1.5ｍ、南北約1.5ｍ、深さは約0.6ｍある。底面の標高は23.1ｍである。井戸側となる石組や木枠は確認できなかった。鎌倉時代（13世紀）の遺物が出土した。

井戸15（図版13・22）　調査区北半で検出した。井戸14を削平する。石組井戸である。掘形の平面形は歪な円形で、東西約1.8ｍ、南北約1.9ｍ、深さは約0.7ｍある。底面の標高は22.9ｍである。石組は隅丸方形状に組まれ、内径は東西約0.8ｍ、南北約1.0ｍある。石材はチャートと砂岩が混在する。直方形の石材の小口を内側にして積む。石組の下部には方形に組まれた板材の一部が残

存していた。水溜施設などは確認できなかった。埋土から鎌倉時代（13世紀代）の遺物が出土した。井戸14と掘形規模が類似すること、井戸14の石材が抜き取られていることなどから、井戸14から井戸15へ造り替えが行われたと考えられる。

ピット列１～３（図版13）　調査区南半で、東西方向のピット列を３列検出した。

ピット列１は、ピット５～８で構成される。方位は北に対して約７度西に振れる。柱間は0.7～1.4ｍで不等間である。ピット掘形の平面形は円形で、径0.28～0.4ｍ、深さは0.08～0.12ｍある。ピット８のみ柱痕が確認できた。柱痕の径は0.1ｍある。

ピット列２は、ピット９～12・20で構成される。方位は北に対して約４度西に振れる。柱間は0.4～0.8ｍで不等間である。ピット掘形の平面形は円形で、径0.15～0.35ｍ、深さは0.05～0.2ｍある。

ピット列３は、ピット２・３・21で構成される。方位は北に対して約３度西に振れる。柱間は0.7と1.3ｍで不等間である。ピット掘形の平面形は円形で、径約0.35ｍ、深さは約0.1ｍある。

４．遺　　物

（１）遺物の概要（表４）

今回の調査では、整理用コンテナにして30箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶磁器類、瓦類、木製品、金属製品、石製品、骨・貝、種実がある。約８割を土器・陶磁器類が占め、残り２割が瓦類と木製品で、それ以外は微量である。遺物の帰属時期は、平安時代、鎌倉時代、室町時代、桃山時代、江戸時代、近代のものに分けられ、そのうち江戸時代の遺物が約７割を占める。

（２）土器類（図版14・23）

１は、Ａ区の現代盛土中から出土した灰釉陶器の皿である。内面の残存部全面に灰釉がかかる。

２・３はＢ区の土坑28から出土した。２は須恵器壷で底部は糸切り、肩部には自然釉がかかる。３は山城産の緑釉陶器椀である。焼成は軟質で胎土もやや粗い。

４はＣ区の土坑135から出土した。土師器椀で外面は剥離が顕著で遺存状況は悪いが、ケズリの痕跡が残る。時期は京都Ⅰ期新段階からⅡ期古段階[1)]である。

５はＣ区の土坑70から出土した灰釉陶器蓋である。外面全面に釉がかかる。内面は無釉である。内面に「三ヵ」の墨書がある[2)]。

６～12はＣ区の土坑130から出土した。土坑130は近世の土取り穴と考えられ、出土した土器は平安時代から鎌倉時代のものが混在する。６～10は土師器皿である。時期は、京都Ⅴ期からⅥ期のものである。11は黒色土器椀である。内黒で、内面に連結輪状のミガキを施した後、口縁部直下に横方向のミガキを施す。12は瓦器小皿である。内面底部に平行線状のミガキを施す。

13～17はＣ区の御土居の濠298から出土した。13～16は施釉陶器である。13は志野向付である。口縁部は欠損する。14は瀬戸美濃系の天目椀である。15は肥前系の椀である。16は京焼系の椀で

表４　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、緑釉陶器、黒色土器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類		土師器１点、須恵器１点、灰釉陶器２点、緑釉陶器１点、黒色土器１点、瓦類６点：計12点		
鎌倉時代～室町時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶椀、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、土製品、瓦類、金属製品、鋳造関係		土師器７点、瓦器４点、輸入陶磁器１点、鉄滓１点：計13点		
桃山時代～江戸時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、瓦類、木製品、金属製品、石製品、動植物遺体		施釉陶器４点、染付磁器１点、木製品54点：計59点		
合　計		37箱	84点（４箱）	３箱	30箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａ・Ｂランクの遺物を抽出したため、出土時より７箱多くなっている。

ある。全面に施釉する。17は磁器で、肥前系の染付椀である。高台は高く、離れ砂が付着する。

18・19はＥ区の井戸14から出土した。18は土師器皿である。京都Ⅵ期段階か。19は樟葉産の瓦器椀である。

20～23はＥ区の井戸15から出土した。20は土師器皿である。京都Ⅵ期段階か。21・22は樟葉産の瓦器椀である。23は輸入陶磁器の青白磁合子蓋である。

（３）瓦類（図版14・23）

瓦は各調査区から出土したが、総量は少ない。Ｃ区の濠298とＥ区の井戸15からはややまとまって瓦が出土した。

瓦１・２は軒丸瓦である。ともにＣ区濠298から出土した。瓦１は単弁16弁蓮華文軒丸瓦である。中房には推定１＋５の連子を配する。連子の数は異なるが、長岡宮式7235形式[3)]と同一の意匠である。長岡宮からの搬入瓦と考えられる。焼成はやや軟質である。瓦２は単弁蓮華文軒丸瓦である。平安時代後期の山城産。焼成は硬質で、胎土に長石・石英を多量に含む。

瓦３～６は軒平瓦である。瓦３～５はＥ区井戸15から出土した。瓦３は唐草文軒平瓦である。平安時代中期の栗栖野窯の瓦と同文[4)]。焼成は硬質である。顎部裏面から平瓦部凸面にかけて赤色顔料が付着する。瓦４は蓮華文軒平瓦である。摩滅が著しく、産地など不明。焼成はやや軟質である。瓦５は唐草文軒平瓦である。長岡宮からの搬入瓦か。焼成はやや軟質である。瓦６は唐草文軒平瓦である。Ｃ区の近代耕作土中から出土した。平安時代後期の山城産。顎部成形は折り曲げ技法による。焼成はやや軟質である。

（４）木製品（図版15・16・24）

御土居の濠298上層から多量の木製品が出土した。

木１～14は墨書もしくは焼印が認められる木製品である。

木１～８は木簡である。木１は両面に墨書がある。表面は「のしゆ瓦ヵ」の墨書があり[5)]、裏面は判読できない。木２は先端を三角形状に加工したもので、両面に墨書がある。文字の遺存状況が悪く判読が困難だが、表面に「休ヵゆヵ」の墨書がある。木３は両面に墨書があるが判読不可。木４は表面に「墨」の墨書がある。木５は両面に墨書がある。表面は「薬ヵ」の墨書があり、２文字目は「佛」または「物」または「師」の字を墨書した可能性がある。裏面は「江と留」の墨書がある。木６は表面に墨書がある。判読不可。木７は表面に「墨記」の墨書がある。裏面には墨痕が認められる。木８は表面に墨書があり、横方向の線と判読できない文字を墨書する。

木９は曲物側板状の木製品で、長方形の幾何学的な紋様を墨書する。

木10・11は板状木製品である。木10は下部を折損する。丸の線で囲む「金」の焼印があり、被熱により一部炭化する。木11は中央に切り欠きがある。表面に判読不明の文字を菱形の線で囲む焼印がある。

木12は隅切り角の形状を呈す。表面に「大」、裏面に「十」を線刻する。また、表面は全体に、

裏面は線刻の「十」に重なるように「●（黒丸）」を墨書する。

木13・14は糸巻の横木で、中央に方形の切り込みを入れて、円孔を穿つ。木13は「け」、木14は「九」をそれぞれ墨書する。

木15・16は糸巻の枠木である。横木を組み合わせるための円孔を２箇所穿つ。

木17は不明木製品である。円形を呈し、中央に孔を穿つ。

木18は木栓である。細かいケズリで先細りに加工する。

木19は用途不明の部材である。円形の切り込みを入れ、枘を加工する。

木20・21は部材である。木20は半月状を呈し、切り込みを入れる。両端２箇所に木釘が遺存する。木21は漆塗りし、両端および側面４箇所に木釘が遺存する。

木22～24は曲物底板である。木22は裏面には朱漆が塗られる。

木25は不明木製品である。一部欠損しており、全形は不明である。隅切り角の形状を呈し、透かしを加工する。

木26～28は板状木製品である。中央に小孔を穿つ。木26・27は側面に木釘が遺存する。

木29は棒状木製品である。長さ24.3㎝で、表面は粗く削る。

木30～42は箸である。粗いケズリによって仕上げ、断面は多角形状を呈す。先端の加工も先細りさせるものと先細りさせないものが混在する。木38は上端が焼けこげている。木42は長さ11.0㎝で、最小のものである。

木43～45は黒文字である。箸より加工が丁寧で、平滑に仕上げる。

木46は棗状の容器である。楕円形状を呈し、受部をもつ。

木47～49は漆器である。木48は黒漆により仕上げられ、黒漆が剥離した部分は粗い条線状の加工痕が露出する。木49は椀である。「ハ」の字形の高台が付き、底部に朱漆で「上□」と書く。

木50は馬脚である。後脚を模したものと考えられ、廃棄時に脛から下を切断する。

木51は人形である。裃を着て、正座する人物を模す。手の差し込み穴と底面の穴は連結している。

木52は人形頭部である。頭部の首より下に枘を造り出す。顔面は加工しておらず、未製品の可能性がある。

木53・54は櫛である。木54は梳き櫛で、櫛歯が稠密である。

上記の木製品以外に、図版21－２の竹製の編籠ないし網代が出土した。遺存状態が悪く、全形は不明である。

（５）その他の遺物

Ｃ区の土坑130から種実、昆虫などが出土した。種実はタデ、ザクロソウ、オトギリソウ、バラ、トウダイグサ、アリノトウグサ、シソ、イグサ、イネ、カヤツリグサが出土した。昆虫は種類不明の上翅、脇腹が出土した。他に、ミジンコの耐久卵が出土している。

Ｃ区の御土居の濠298から動物骨、貝、種実が出土した。主として、上層の泥層から出土し、江

戸時代中期以降のものである。動物骨はウシ・ウマ椎骨付近、ウシ右寛骨が出土した。他に、イノシシ脛骨、イヌ大腿骨、ウサギ右脛骨の可能性のある骨が出土した。貝はアカガイ、ハマグリの可能性がある二枚貝が出土した。種実は、ヒシ、ウメ、マクワ・シロウリないしモモルディカメロン、オニグルミ、カヤ、モモ、マツ球果、オオムギ（炭化）が出土した。他に、濠298からは、サクラ樹皮や多量の竹が出土した。

Ｅ区の井戸15からは、多量の鉄滓（金１）が出土した（図版23）。合わせて重量は2,180グラムある。

註

１）　土師器皿の型式・年代については、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年　に準拠する。

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080～90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580～90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃
Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	ⅩⅢ	ⅩⅣ

古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

２）　墨書については土器・木製品ともに、京都産業大学の吉野秋二先生、笹部昌利先生、平良聡弘先生から御教示を得た。記して感謝申し上げます。

３）　『長岡京古瓦聚成』向日市埋蔵文化財調査報告書第20集　向日市教育委員会　1987年

４）　『木村捷三郎収集瓦図録』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年　の図版11－80と同文。

５）　註２）に同じ。

５．ま と め

今回の調査では、各調査区ともに遺構面の遺存状況は良好ではなかったものの、平安時代から江戸時代の遺構・遺物を検出することができた。

平安時代の遺構は、Ｂ区の土坑やＣ区の掘立柱建物など少数であった。削平を受けた可能性もあるが、後世の遺構に混入したものも含めて平安時代に帰属する遺物の出土量も少なく、宅地としては活発に利用されなかったと考えられる。

鎌倉時代の遺構には、Ｅ区で見つかった井戸２基がある。Ｅ区の所在する右京七条一坊四町には西鴻臚館が所在したとされる。しかし、西鴻臚館は平安時代後期には衰退し、北側の一坊三町のみとなったとされる[1)]ことから、この井戸は鴻臚館に付属するものではないと考えられる。この井戸からは、鉄滓がまとまって出土した。右京の七条大路周辺は、平安時代後期以降、「西七条」と呼ばれ、金属加工に携わる職人が居住したとされる[2)]ことから、この井戸もその一端を表す遺構と推測される。一方で、この井戸やＣ区の濠298から出土した瓦には、長岡京からの搬入瓦が含まれ、それらは西鴻臚館で使用されたものが混入した可能性が高い[3)]。

Ｅ区以外では、鎌倉時代から室町時代に属する遺構は希薄であるが、各調査区ともに近世の土坑などに混入して当該時期の遺物が一定量出土しており、近隣には中世の集落が存在したと考えられる。

桃山時代の遺構には、Ｃ区で見つかった御土居の濠がある。西肩部のみの検出であったが、多量の木製品や木簡が出土した。濠は、最終的には明治時代になって人為的に埋め戻され、その後耕作地となったことが判明したが、周辺調査でも同様の成果が得られており、それを追認することができた。

江戸時代の遺構には、土取り穴と考えられる土坑群があり、耕作と並行して土取りを行っていた様子が復元できる。

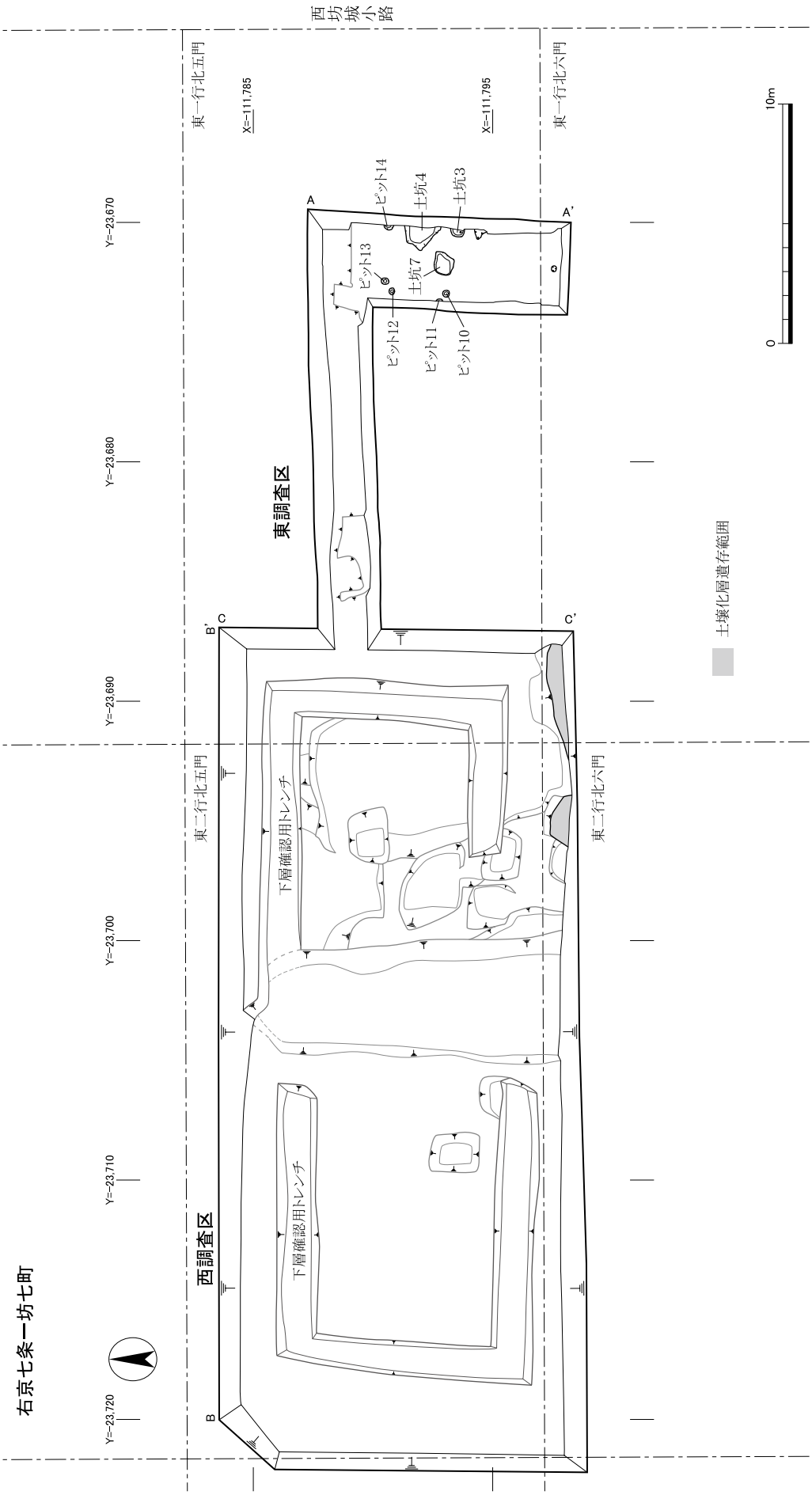
註

１）　角田文衛「平安京の鴻臚館」『古代文化』第42巻第8号　1980年

２）　久米舞子「平安京「西京」の形成」『古代文化』第64巻第３号　2012年、南　孝雄「第四章　衰退後の右京－十世紀後半から十二世紀の様相」『平安京の地域形成』京都大学学術出版会　2016年

３）　鈴木久男「第３節　平安京右京七条一坊の軒瓦について」『長岡京古瓦聚成』向日市埋蔵文化財調査報告書第20集　向日市教育委員会　1987年

図　　版

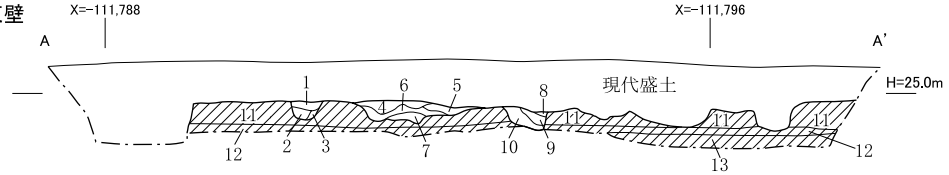

西坊城小路
東一行北五門
東一行北六門
X=-111,785
X=-111,795
Y=-23,670
Y=-23,680
Y=-23,690
Y=-23,700
Y=-23,710
Y=-23,720
A
A'
B
B'
C
C'
ピット14
土坑4
土坑3
ピット13
土坑7
ピット12
ピット11
ピット10
東調査区
西調査区
東二行北五門
東二行北六門
下層確認用トレンチ
下層確認用トレンチ
土壌化層遺存範囲
0
10m
右京七条一坊七町

A区平面図（1：250）

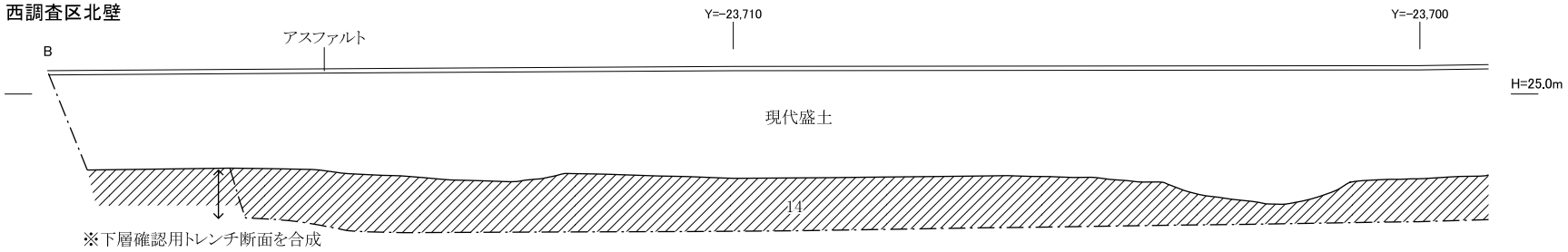
図版2 遺構

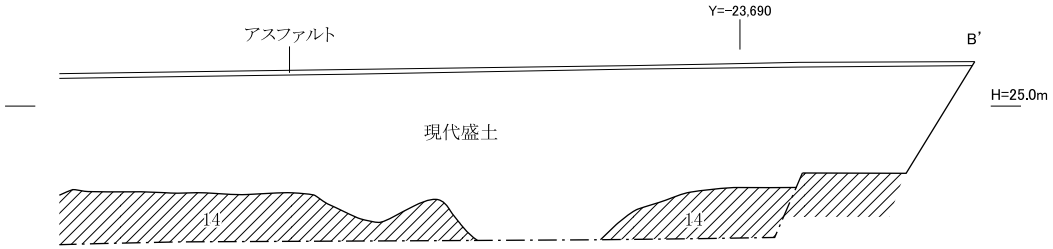
A区断面図（1：100）

東調査区東壁



西調査区北壁





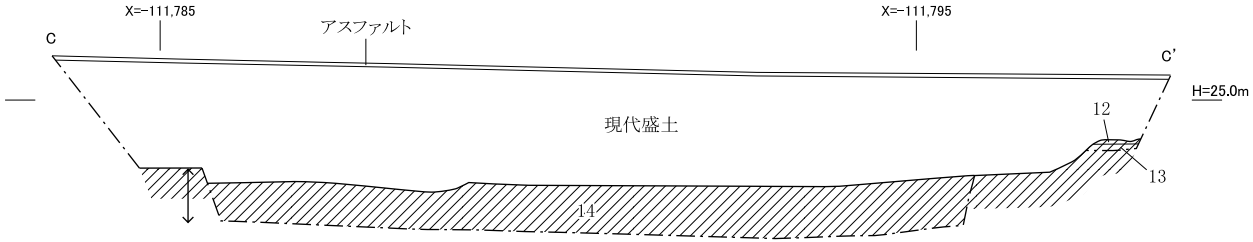
1 5Y3/1 オリーブ黒色 粘質土
2 2.5Y3/1 黒褐色 粘質土
3 10YR2/2 黒褐色 粘質土
（ピット14）

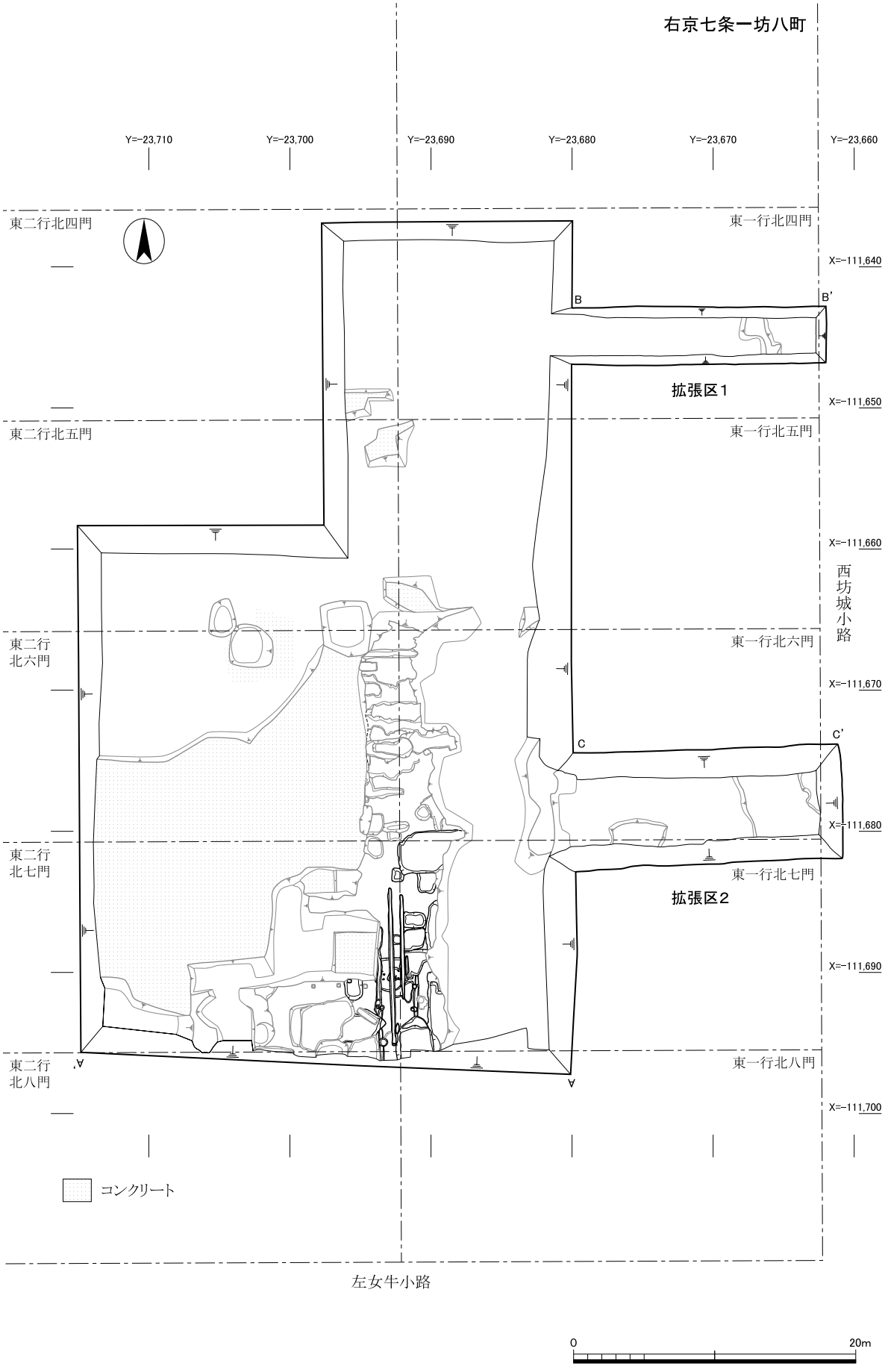
4 10YR2/1 黒色 粘質土に2.5Y3/2 黒褐色 粘質土が斑に混じる
5 10YR3/4 暗褐色 粘質土に10YR4/1 褐色 粘質土が混じる
6 2.5Y4/1 黄灰色 粘質土に10YR2/2 黒褐色 粘質土がブロック状に混じる
7 10YR2/2 黒褐色 粘質土に10YR2/1 黒色 粘質土が少量混じる
（土坑4）

8 5Y4/1 灰色 粘質土
9 2.5Y4/1 黄灰色 粘質土に10YR2/2 黒褐色 粘質土がブロック状に混じる
10 5Y4/1 灰色 粘質土に2.5Y4/4 オリーブ褐色 粘質土が少量混じる
（土坑3）

11 10YR2/2 黒褐色 粘質土（土壌化層）
12 10YR3/4 暗褐色 シルト砂礫混じり（土壌化層）
13 10YR4/2 にぶい黄褐色 粘質シルト φ0.5～1.5cmの礫中量混じる
14 5Y7/2 灰白色 砂礫 斜交層理が発達する
（基盤層）

西調査区東壁



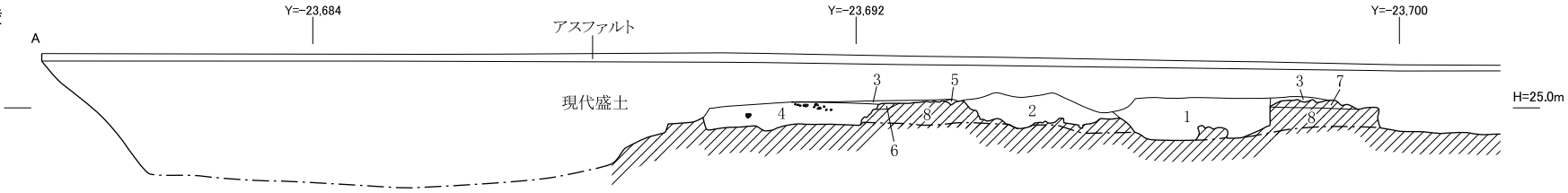

右京七条一坊八町
Y=-23,710
Y=-23,700
Y=-23,690
Y=-23,680
Y=-23,670
Y=-23,660
東二行北四門
東一行北四門
X=-111,640
B
B'
拡張区1
X=-111,650
東二行北五門
東一行北五門
X=-111,660
西坊城小路
東二行北六門
東一行北六門
X=-111,670
C
C'
X=-111,680
東二行北七門
東一行北七門
拡張区2
X=-111,690
東二行北八門
東一行北八門
A'
A
X=-111,700
コンクリート
左女牛小路
0
20m

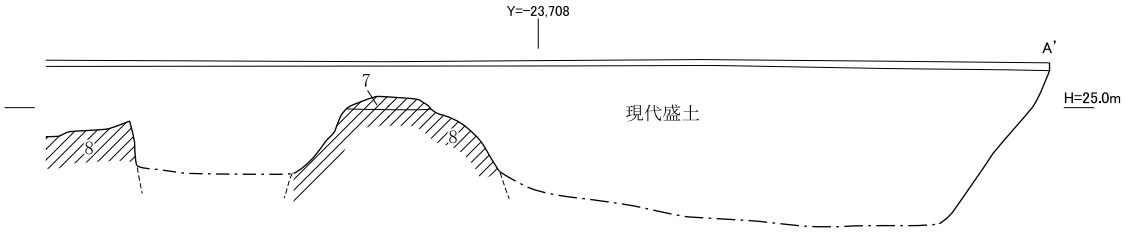
B区平面図（1：400）

図版4 遺構

B区断面図（1：100）

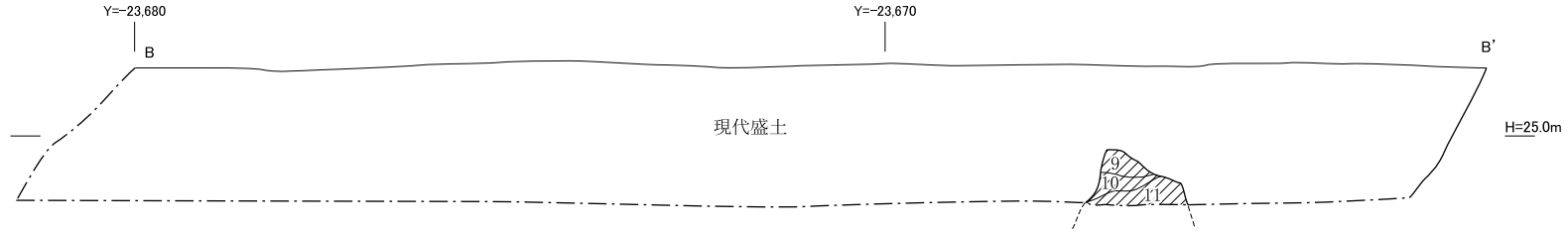
南壁



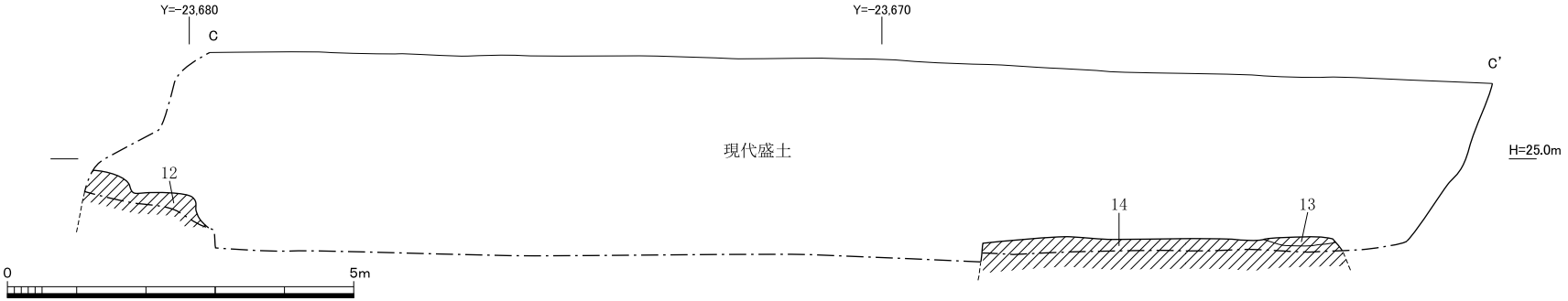


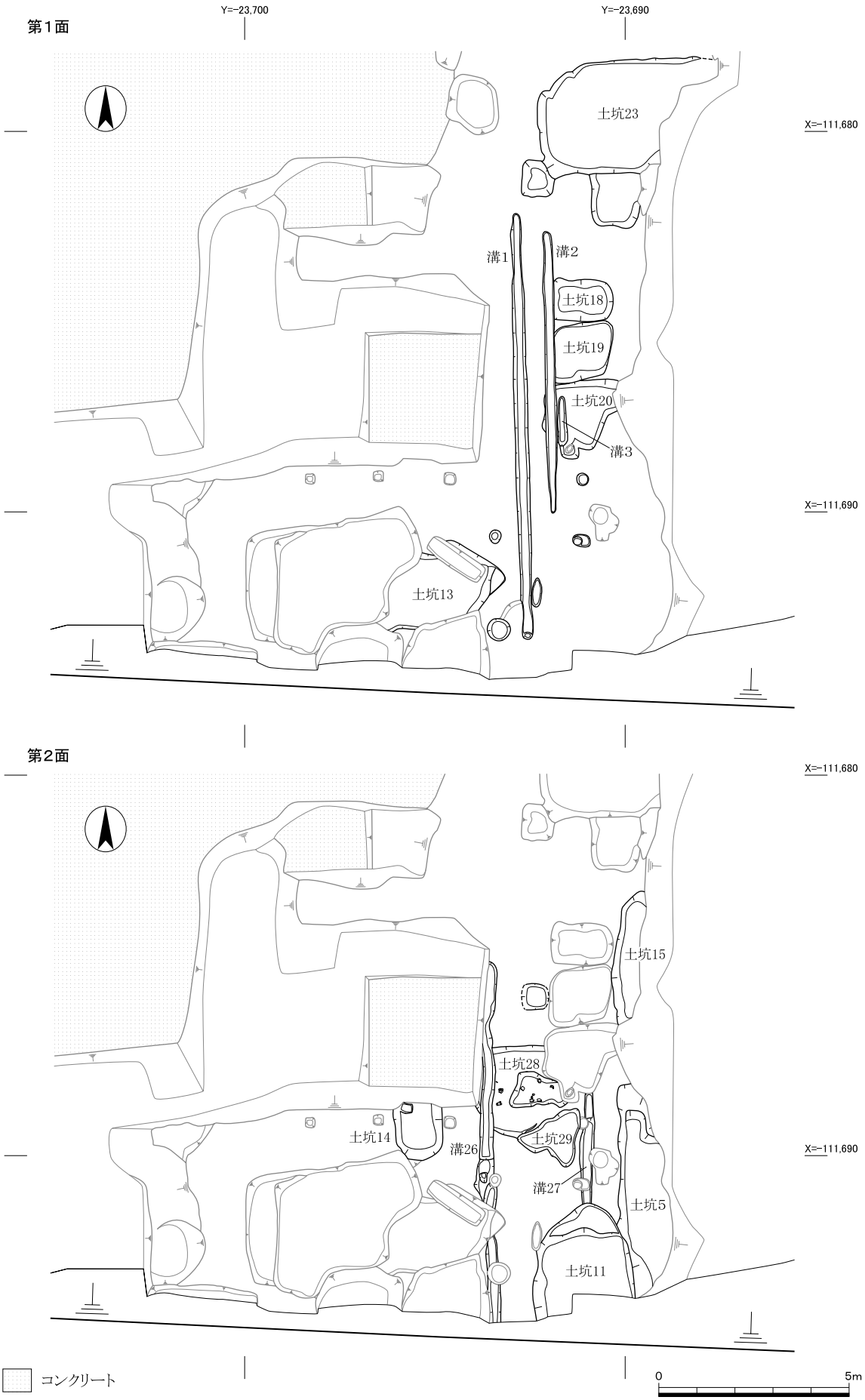
1 5Y8/1 灰白色 礫 粗砂～極粗砂多量含む
2 5B6/1 青灰色 シルト シルト(基盤層)ブロックを多量含む
（現代攪乱）
3 10YR6/3 にぶい黄橙色 粗砂混シルト～細砂(中世遺物包含層)
4 10YR6/1 褐灰色 極細砂 シルトブロック、砂礫ブロック混じる(土坑11)
5 10YR7/1 灰白色 粘質シルト 粗砂少量含む(溝26)
6 10YR6/1 褐灰色 シルト混粗砂～極粗砂
7 10YR7/2 灰白色 シルト～極細砂 弱い土壌化
8 10YR5/1 褐灰色 粘質シルト 土壌化層
9 10YR5/1 褐灰色 細砂
10 2.5Y3/1 黒褐色 シルト
11 2.5Y3/1 黒褐色 粘質シルト
12 10YR5/1 褐灰色 粘質シルト
13 7.5YR5/1 褐灰色 粗砂
14 10YR5/8 明赤褐色 砂礫
（基盤層）

拡張区1北壁

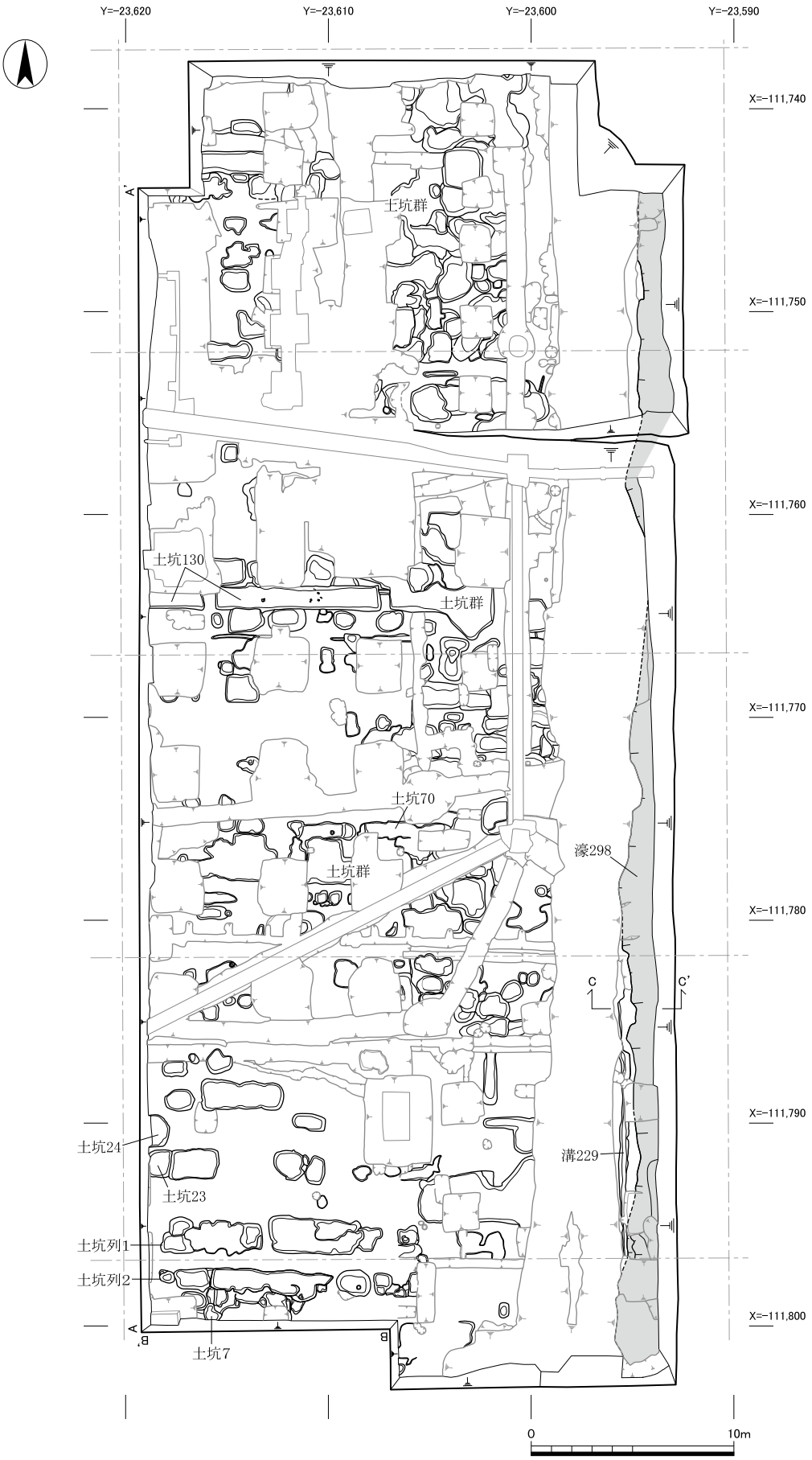


拡張区2北壁

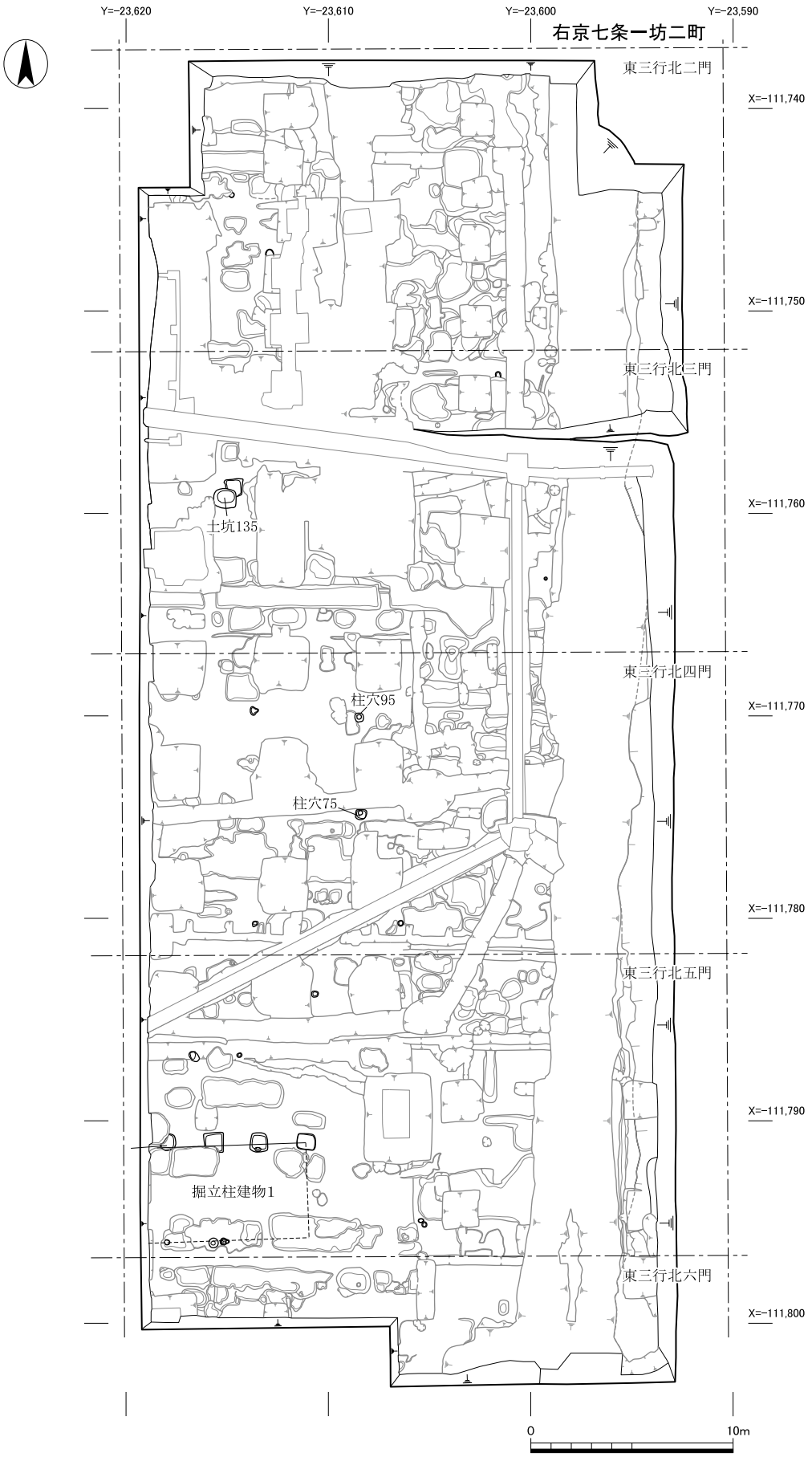




B区拡大平面図（1：150）



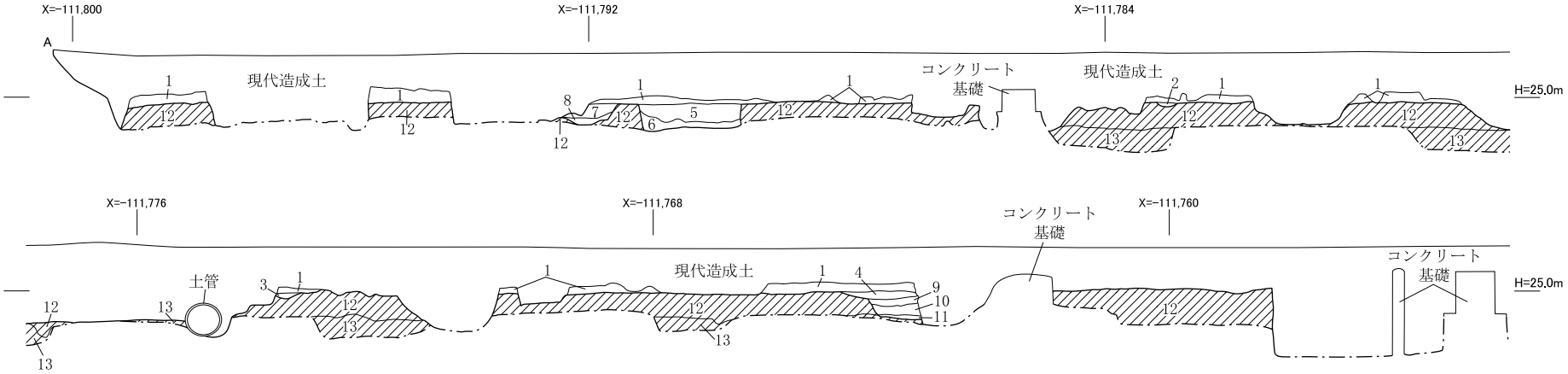
C区第1面平面図（1：300）

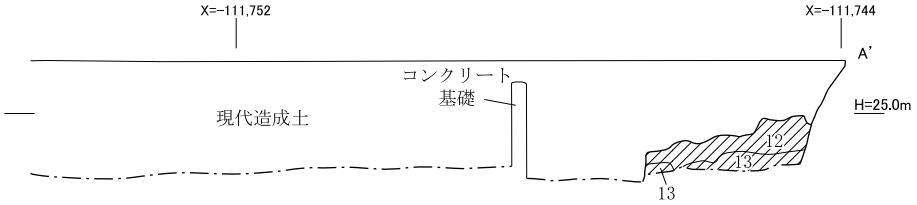


C区第２面平面図（１：300）

C区西壁・南壁断面図（1：100）

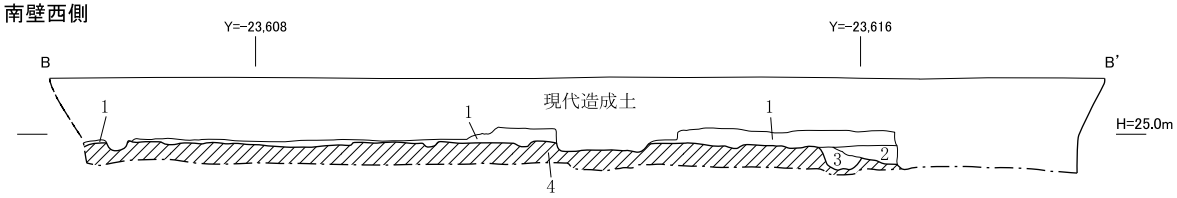
西壁





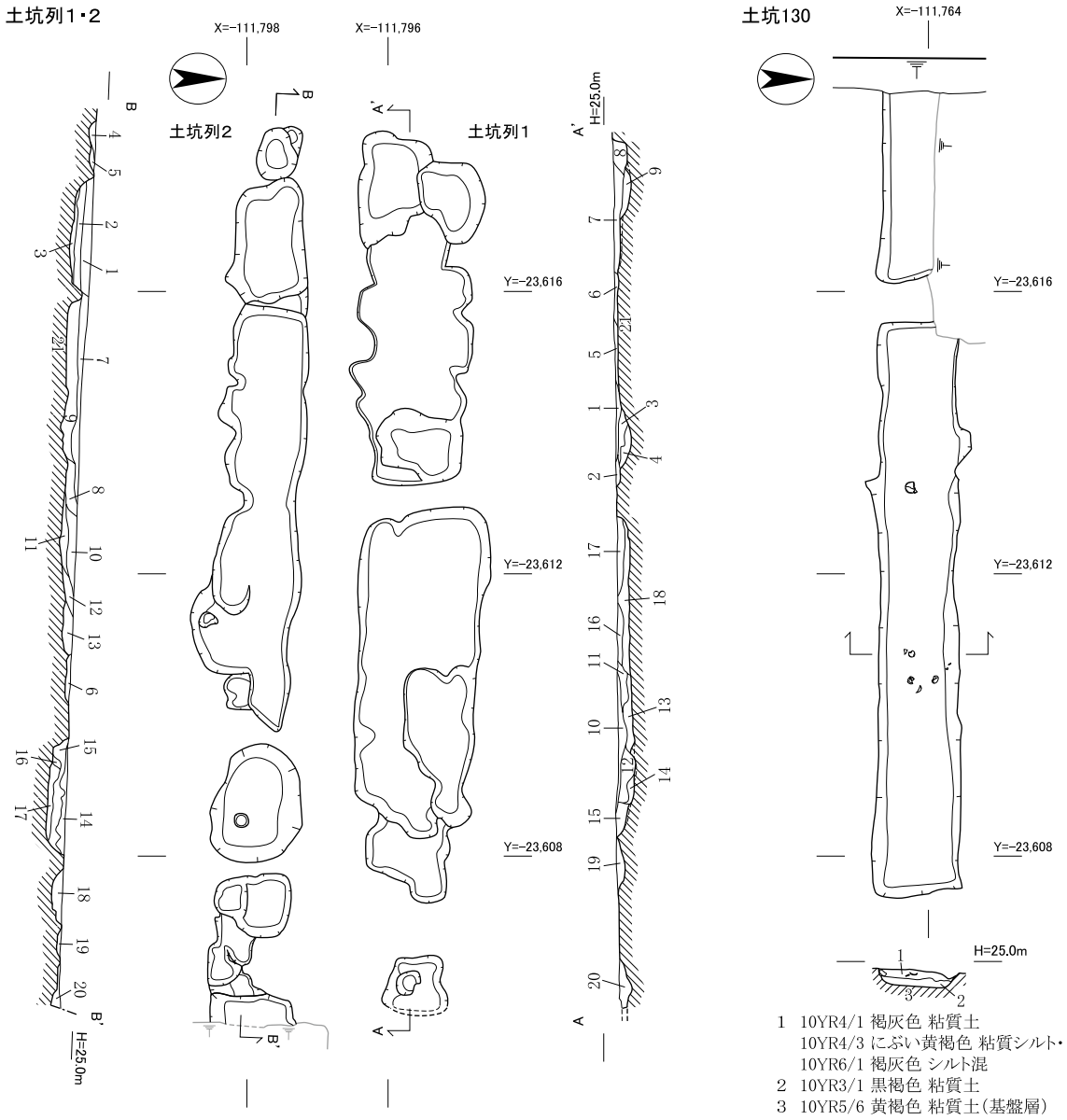
1 10YR4/2 灰黄褐色 砂泥(近世耕作土)
2 2.5Y4/1 黄灰色 砂泥 基盤層由来のブロック土少量含む
3 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂泥
4 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥
5 10YR2/3 黒褐色 砂泥 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥少量含む
6 10YR4/1 褐灰色 砂泥 (土坑24)
7 10YR4/1 褐灰色 砂泥 10YR3/1 黒褐色 砂泥と 10YR4/4 褐色 砂泥ブロック少量含む
8 10YR4/4 褐色 砂泥 10YR4/1 褐灰色 粘質砂泥 ブロック少量混じる (土坑23)
9 10YR4/1 褐灰色 砂泥 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂泥と 10YR6/1 褐灰色 砂泥少量含む
10 2.5Y4/1 黄灰色 砂泥
11 2.5Y4/2 暗灰黄色 細砂 (土坑130)
12 10YR5/6 黄褐色 砂泥
13 10YR3/4 暗褐色 砂礫 (基盤層)

南壁西側



1 10YR4/2 灰黄褐色 砂泥(近世耕作土)
2 10YR4/1 褐灰色 砂泥 10YR5/6 黄褐色 砂泥(基盤層由来)少量含む
3 10YR4/2 灰黄褐色 砂泥 10YR3/2 黒褐色 砂泥と 10YR5/6 黄褐色 砂泥含む(土坑7)
4 10YR5/6 黄褐色 砂泥(基盤層)

0 5m



1 10YR4/1 褐灰色 粘質土
10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質シルト・
10YR6/1 褐灰色 シルト混
2 10YR3/1 黒褐色 粘質土
3 10YR5/6 黄褐色 粘質土(基盤層)

土坑列2（B－B'）

1 10YR4/1 褐灰色 粘質土 10YR4/4 褐色 粘質土混
2 10YR4/1 褐灰色 粘質土 10YR3/2 黒褐色 粘質土混
3 10YR5/6 黄褐色 粘質土 10YR4/1 褐灰色 粘質土混
4 10YR2/2 黒褐色 粘質土 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト混
5 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト 10YR3/1 黒褐色 粘質土・
10YR4/6 褐色 粘質土混
6 10YR4/1 褐灰色 粘質土 10YR4/4 褐色 粘質土混
7 10YR4/1 褐灰色 粘質土 10YR5/6 黄褐色 粘質土混
8 10YR4/1 褐灰色 粘質土 10YR5/6 黄褐色 粘質土・
10YR3/1 黒褐色 粘質土混
9 10YR4/1 褐灰色 粘質土 10YR3/1 黒褐色 粘質土混
10 10YR4/1 褐灰色 粘質土 10YR4/4 褐色 粘質土・
10YR5/6 黄褐色 粘質土混
11 10YR4/1 褐灰色 粘質土 10YR4/4 褐色 粘質土・
10YR5/6 黄褐色 粘質土混
12 10YR5/6 黄褐色 粘質土 10YR3/1 黒褐色 粘質土混
13 10YR4/1 褐灰色 粘質土 10YR3/1 黒褐色 粘質土・
7.5YR3/4 暗褐色 粘質土混
14 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト 10YR4/4 褐色 粘質土・礫少量混
15 10YR4/4 褐色 粘質土 10YR3/2 黒褐色 粘質土混
16 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト
17 10YR5/6 黄褐色 粘質土
18 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト 10YR3/2 黒褐色 粘質土混
19 10YR4/1 褐灰色 粘質土 10YR4/4 褐色 粘質土・
10YR5/6 黄褐色 粘質土混
20 10YR4/1 褐灰色 粘質土 10YR4/4 褐色 粘質土混
21 10YR5/6 黄褐色 粘質土(基盤層)

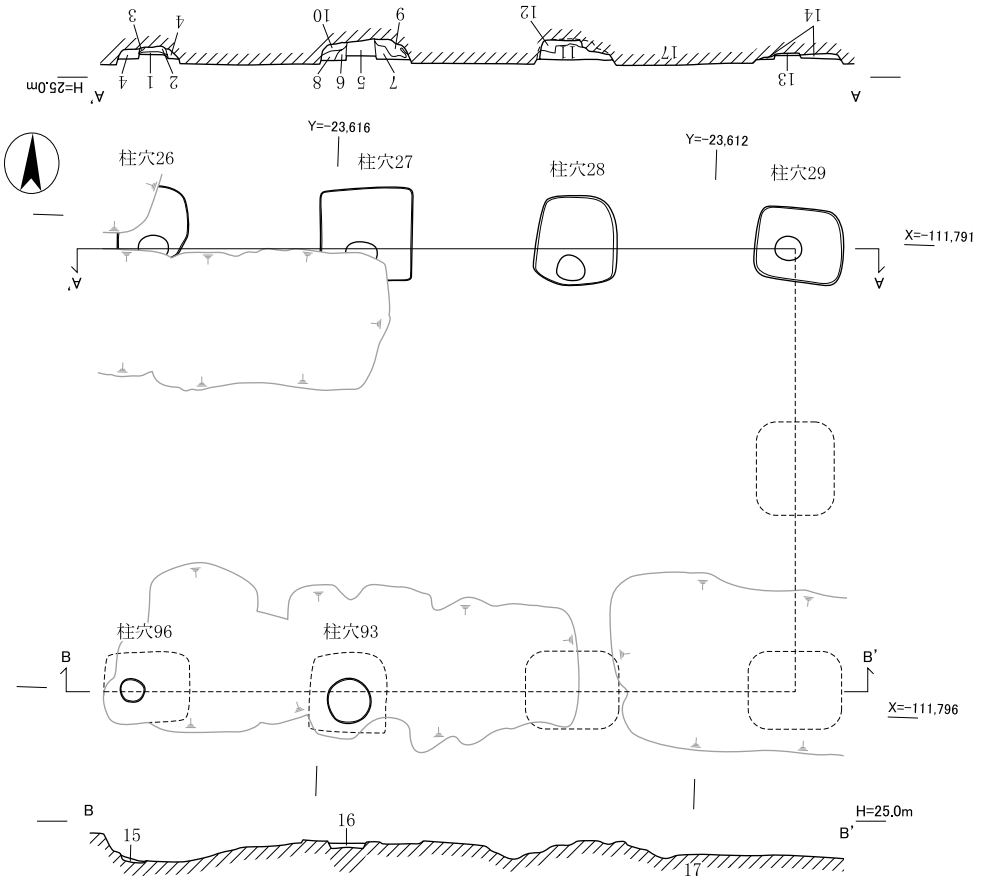
土坑列1（A－A'）

1 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト 10YR3/1 黒褐色 粘質土混
2 10YR3/1 黒褐色 粘質土 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト少量混
3 10YR4/2 灰黄褐色 粘質シルト 10YR4/4 褐色 粘質土混
4 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト 10YR3/1 黒褐色 粘質土・
10YR3/4 暗褐色 粘質土混
5 10YR6/1 褐灰色 シルト 10YR3/1 黒褐色 粘質土少量混
6 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト 10YR3/1 黒褐色 粘質土・
10YR4/4 褐色 粘質土混
7 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト 10YR3/1 黒褐色 粘質土・
10YR4/4 褐色 粘質土混
8 10YR3/1 黒褐色 粘質土 10YR4/4 褐色 粘質土混 固く締まる
9 10YR5/6 黄褐色 粘質土 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト少量混
10 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト
11 10YR3/1 黒褐色 粘質土 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト混
12 10YR4/4 褐色 粘質土 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト混
13 10YR4/4 褐色 粘質土 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト・
10YR3/2 黒褐色 粘質土混
14 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト 10YR4/2 灰黄褐色 粘質シルト混
15 10YR4/2 灰黄褐色 粘質シルト
16 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト 10YR4/2 灰黄褐色 粘質シルト混
17 10YR4/2 灰黄褐色 粘質シルト 10YR3/1 黒褐色 粘質土混
18 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト 10YR5/6 黄褐色 粘質土混
19 10YR4/2 灰黄褐色 粘質シルト 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト・
10YR3/1 黒褐色 粘質土混
20 10YR4/4 褐色 粘質シルト
21 10YR5/6 黄褐色 粘質土(基盤層)

0 3m

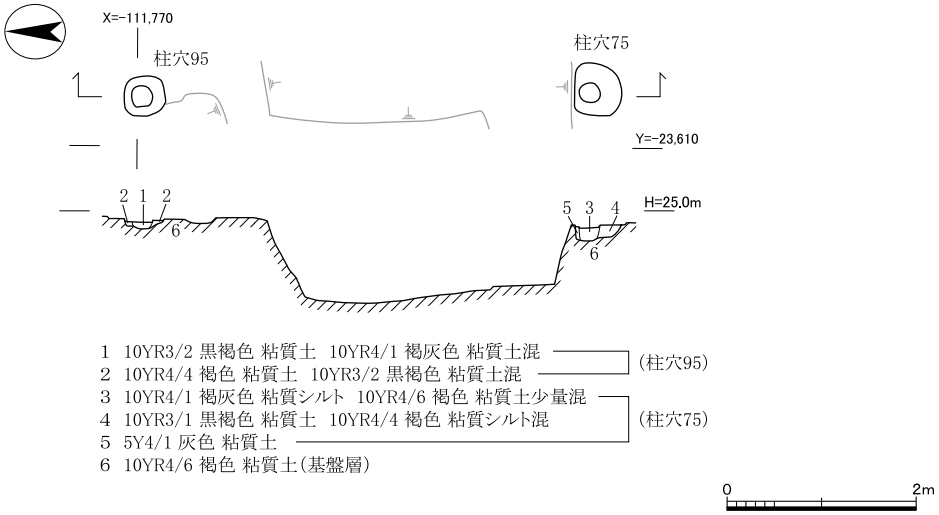
C区土坑列１・２、土坑130実測図（１：100）

掘立柱建物1



1 5Y5/1 灰色 砂泥
2 2.5Y2/1 黒色 砂泥
3 2.5Y5/3 黄褐色 砂泥
4 10YR3/3 暗褐色 砂泥 10YR4/2 灰黄褐色 砂泥混
（柱穴26）
5 2.5Y2/1 黒色 砂泥 2.5Y5/1 黄灰色 砂泥混
6 10YR5/6 黄褐色 砂泥
7 10YR2/2 黒褐色 砂泥 10YR5/6 黄褐色 砂泥混
8 2.5Y5/1 黄灰色 砂泥 2.5Y4/4 黄褐色 砂泥混
9 10YR5/6 黄褐色 砂泥 10YR2/2 黒褐色 砂泥・2.5Y4/1 黄灰色 砂泥ブロック混
10 10YR3/2 黒褐色 砂泥
（柱穴27）
11 10YR2/2 黒褐色 砂泥 2.5Y5/1 黄灰色 砂泥混
12 10YR4/6 褐色 砂泥
（柱穴28）
13 10YR4/6 褐色 砂泥
14 10YR4/2 灰黄褐色 砂泥
10YR5/4 にぶい黄褐色 砂泥混
（柱穴29）
15 5Y5/1 灰色 砂泥(柱穴96)
16 10YR5/6 黄褐色 砂泥(柱穴93)
17 10YR5/6 黄褐色 砂泥(基盤層)

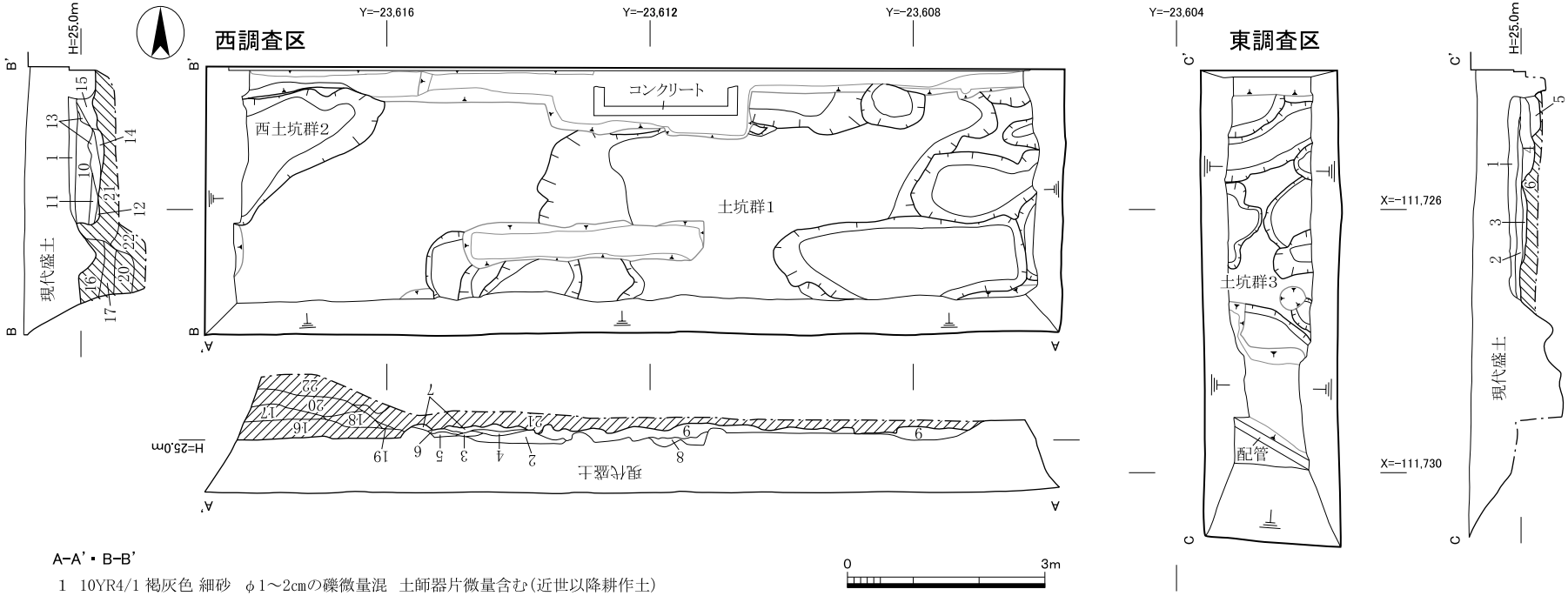
柱穴75・95



1 10YR3/2 黒褐色 粘質土 10YR4/1 褐灰色 粘質土混
2 10YR4/4 褐色 粘質土 10YR3/2 黒褐色 粘質土混
（柱穴95）
3 10YR4/1 褐灰色 粘質シルト 10YR4/6 褐色 粘質土少量混
4 10YR3/1 黒褐色 粘質土 10YR4/4 褐色 粘質シルト混
5 5Y4/1 灰色 粘質土
（柱穴75）
6 10YR4/6 褐色 粘質土(基盤層)

C区掘立柱建物１、柱穴75・95実測図（１：80）

D区実測図（1：100）

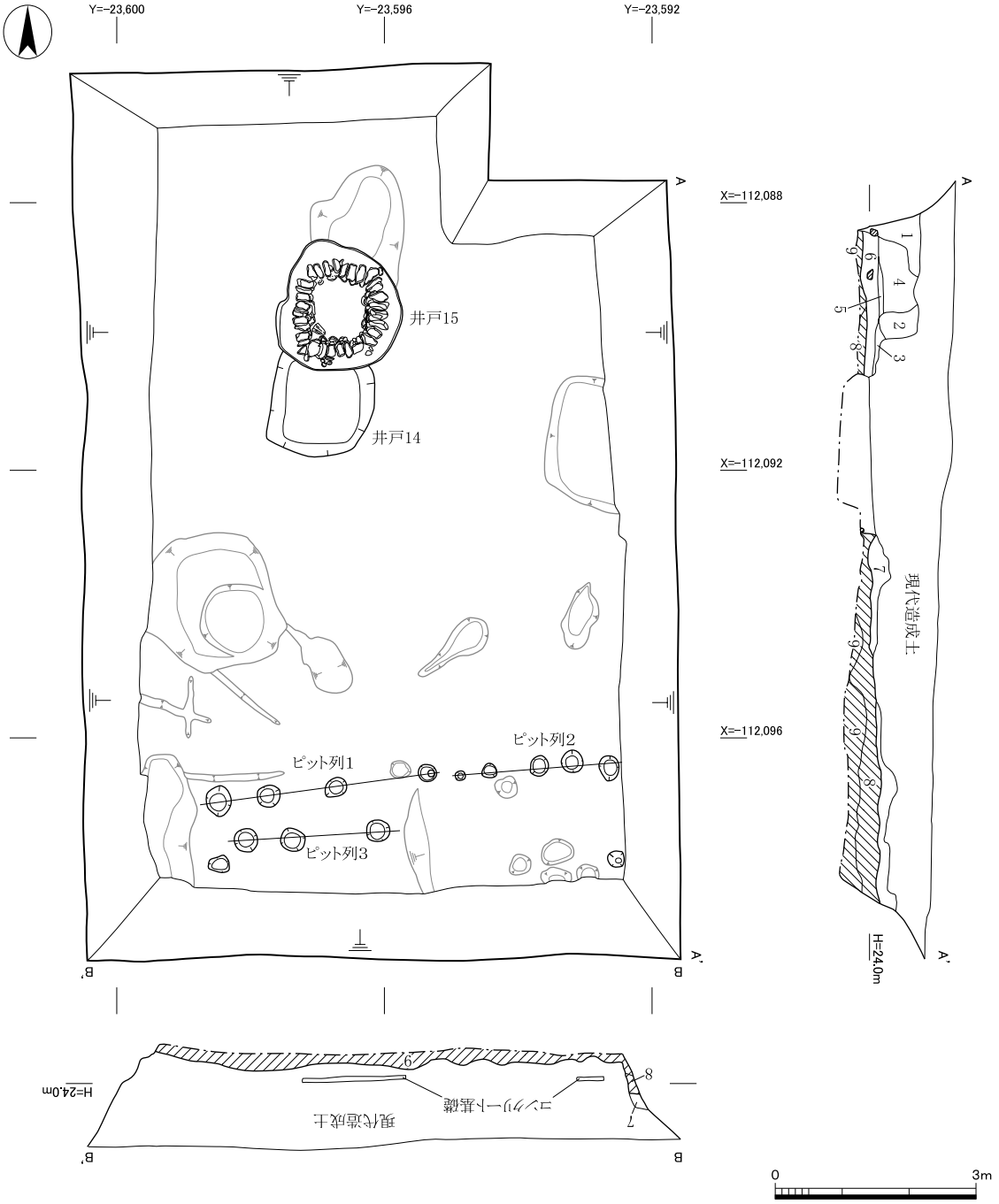


A-A'・B-B'

1 10YR4/1 褐灰色 細砂 φ1～2cmの礫微量混 土師器片微量含む(近世以降耕作土)
2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粗砂 10YR4/2 灰黄褐色 細砂～シルトブロック多量混
3 2.5Y3/2 黒褐色 粗砂～極粗砂
4 10YR4/2 灰黄褐色 シルト～細砂
5 10YR4/2 灰黄褐色 細砂
6 2.5Y3/2 黒褐色 粗砂～極粗砂 φ0.5cmの礫多量混
7 10YR4/6 褐色 シルト 2.5Y3/2 黒褐色 粗砂～極粗砂ブロック少量混
8 10YR4/2 灰黄褐色 細砂 φ0.5～2cm礫微量混
9 2.5Y3/2 黒褐色 粗砂 10YR4/6 褐色 シルトと10YR3/4 暗褐色 粘土がブロック状に混
（土坑群1）
10 10YR4/2 灰黄褐色 シルト～細砂 φ0.5～2cm礫微量混
11 10YR4/2 灰黄褐色 シルト～細砂 10YR4/2 灰黄褐色 粗砂ブロック少量混
12 10YR3/2 黒褐色 シルト10YR4/6 褐色 シルトブロック中量混
13 10YR3/2 黒褐色 粗砂 φ0.5～2cm礫微量混
14 10YR3/4 暗褐色 シルト
15 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト
（土坑群2）
16 7.5YR3/2 黒褐色 粗砂～極粗砂 φ0.5～3cmの礫少量混
17 10YR5/4 にぶい黄褐色 中砂～粗砂 φ0.5～5cm礫中量混
18 10YR4/2 灰黄褐色 細砂と10YR4/4 褐色 細砂が層状に重なる
19 10YR3/3 暗褐色 細砂～中砂
20 10YR3/2 黒褐色 中砂～粗砂 φ1～3cm礫中量混
（自然流路 基盤層）
21 10YR4/6 褐色 シルト 粘土層
22 7.5YR3/1 黒褐色 粗砂～極粗砂 φ1～10cm礫中量混 砂礫層
（基盤層）

C-C'

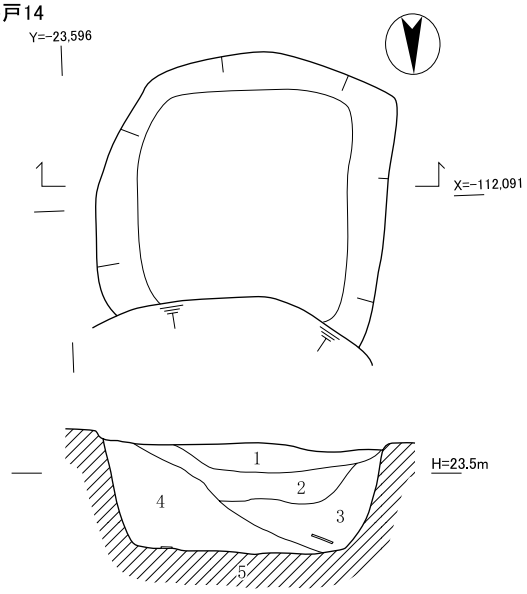
1 5Y5/1 灰色 粘質土 φ1～2cmの礫微量混
遺物、炭少量混
2 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘質シルト～細砂
φ0.5～2cmの礫微量混
（近世以降耕作土）
3 10YR4/2 灰黄褐色 粘質シルト 10YR4/4 褐色
粘質土が混じる 粗砂少量混
4 10YR4/2 灰黄褐色 粘質シルト 10YR3/4 暗灰黄色
粘質土 粗砂～細砂中量混
5 10YR4/1 褐灰色 粘質土
（土坑群3）
6 10YR4/6 褐色 粘質土 粘土層(基盤層)



1 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂泥が混じる
2 10YR4/2 灰黄褐色 砂泥 京焼・瓦含む
3 10YR6/2 灰黄褐色 砂泥 10YR3/1 黒褐色 砂泥と10YR6/6 明黄褐色 砂泥が混じる 瓦含む
（近世）
4 10YR5/2 灰黄褐色 泥砂 10YR2/2 黒褐色 砂泥が混じる 遺物・炭小片を含む
5 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂泥
6 10YR4/2 灰黄褐色 砂泥 φ2～16cm礫含む
7 10YR5/1 褐灰色 砂泥 10YR3/2 黒褐色 砂泥と10YR6/6 明黄褐色 砂泥が混じる φ1～4cm礫含む
（中近世遺物包含層）
8 10YR5/6 黄褐色 砂泥
9 10YR6/1 褐灰色 砂礫 10YR5/2 にぶい黄褐色 砂が混じる φ1～10cm礫含む
（基盤層）

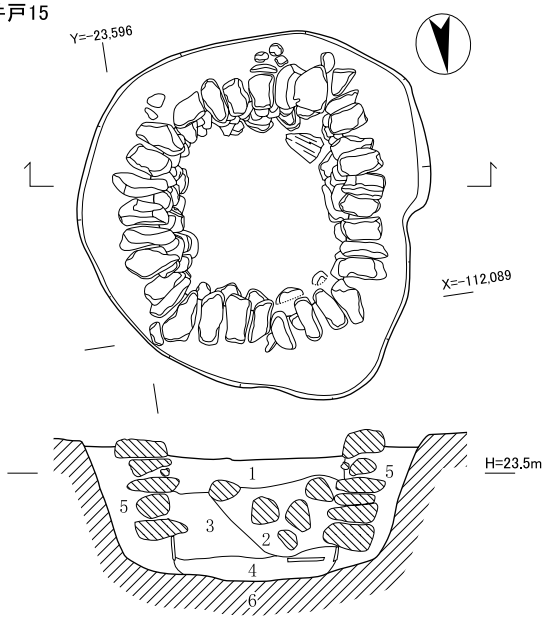
E区実測図（1：100）

井戸14



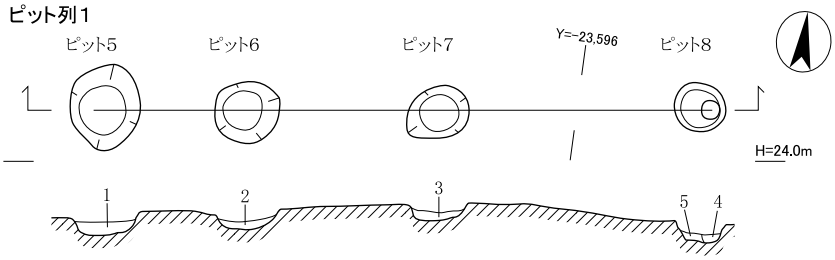
1 10YR3/3 暗褐色 シルト φ0.5～3cm礫中量含む
2 10YR3/1 黒褐色 粘質土と10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質土が同量斑に混じる φ2～4cm礫少量含む
3 10YR3/2 黒褐色 粘質土と10YR3/1 黒褐色 粗砂が層状に重なる φ1～4cm礫中量含む
4 10YR3/2 黒褐色 粘土 10YR4/2 灰黄褐色 粘質土が中量斑に混じる φ0.5～5cm礫多量に含む
5 10YR3/4 暗褐色 粗砂 φ0.5～4cm礫中量含む

井戸15



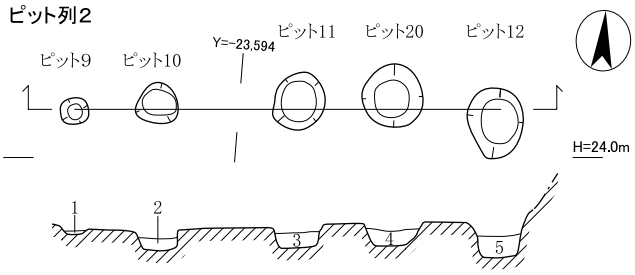
1 10YR3/2 黒褐色 粘質土 φ2～4cm礫中量含む
2 10YR3/3 暗褐色 粘質土 φ2～4cm礫中量含む
3 2に7.5YR6/8 橙色 粘質土が中量斑に混じる
4 10YR3/3 暗褐色 粗砂～細砂 φ0.5～2cm礫中量含む
5 10YR3/2 黒褐色 粘土 φ0.5～4cm礫多量に含む
6 7.5YR4/4 褐色 粗砂 φ0.5～5cm礫多量に含む

ピット列1



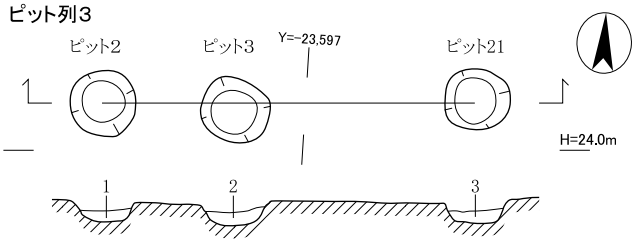
1 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質シルト φ0.5～2cm礫中量
2 10YR4/6 褐色 シルト φ1～4cm礫中量
3 10YR3/4 暗褐色 中砂～シルト φ0.5～4cm礫多量
4 10YR3/3 暗褐色 細砂～シルト
5 7.5YR3/2 黒褐色 中砂～細砂 10YR3/2 黒褐色 細砂～粘質シルトが斑に混じる φ1～5cm礫多量

ピット列2



1 10YR3/2 黒褐色 中砂～細砂
2 10YR3/1 黒褐色 中砂～細砂 10YR3/4 暗褐色 中砂～細砂が斑に混じる φ2～4cm礫多量
3 10YR2/3 黒褐色 中砂～細砂 φ1～5cm礫多量
4 10YR2/3 黒褐色 細砂～シルト 5YR3/2 暗赤褐色 細砂が斑に混じる φ0.5～4cm礫中量
5 10YR3/3 暗褐色 中砂～細砂 φ1～5cm礫多量

ピット列3

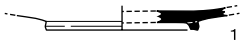


1 10YR3/2 黒褐色 中砂～細砂 φ1～5cm礫多量
2 10YR5/6 黄褐色 シルト φ0.5～3cm礫多量
3 5YR4/4 にぶい赤褐色 中砂～細砂 φ1～5cm礫中量

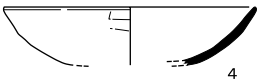
E区井戸14・15、ピット列実測図（1：40）

図版14　遺物

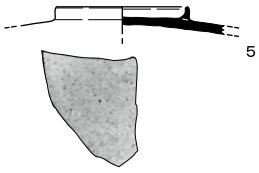
A区　攪乱



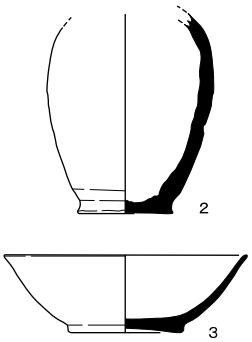
C区　土坑135



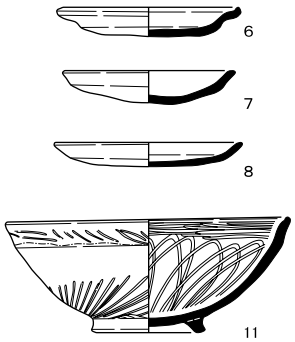
C区　土坑70

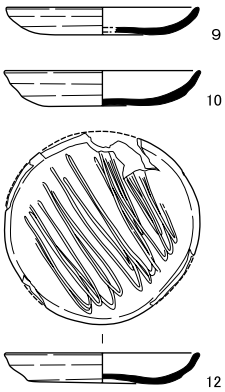


B区　土坑28

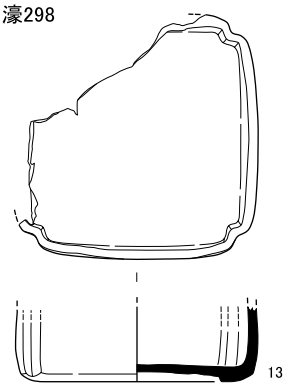


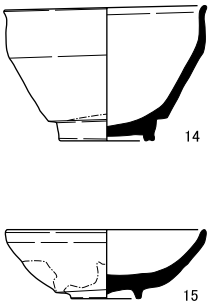
C区　土坑130

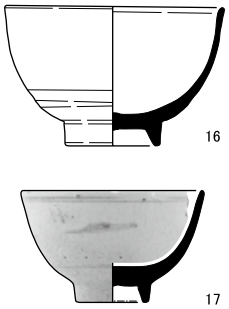




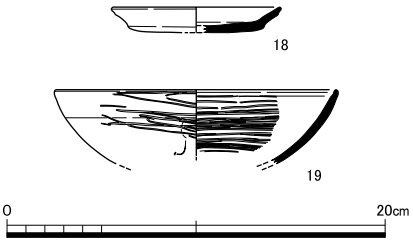
C区　濠298



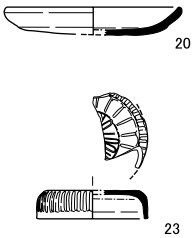


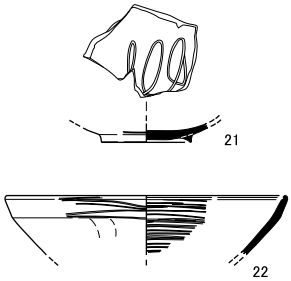


E区　井戸14

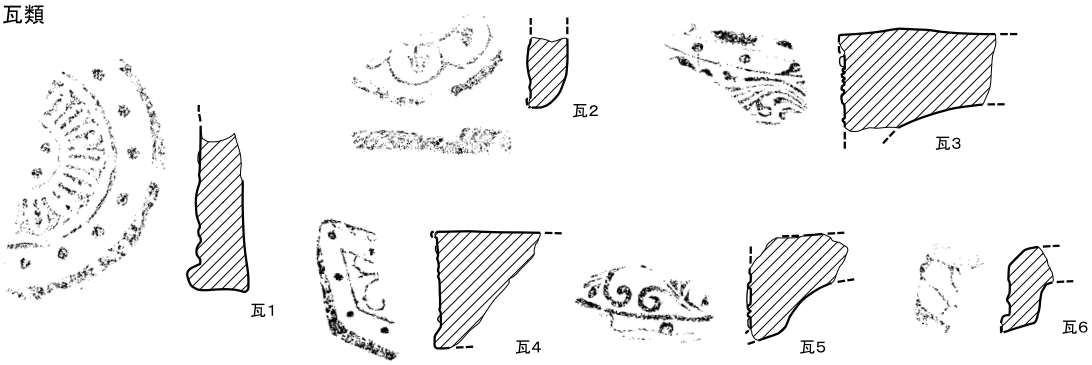


E区　井戸15

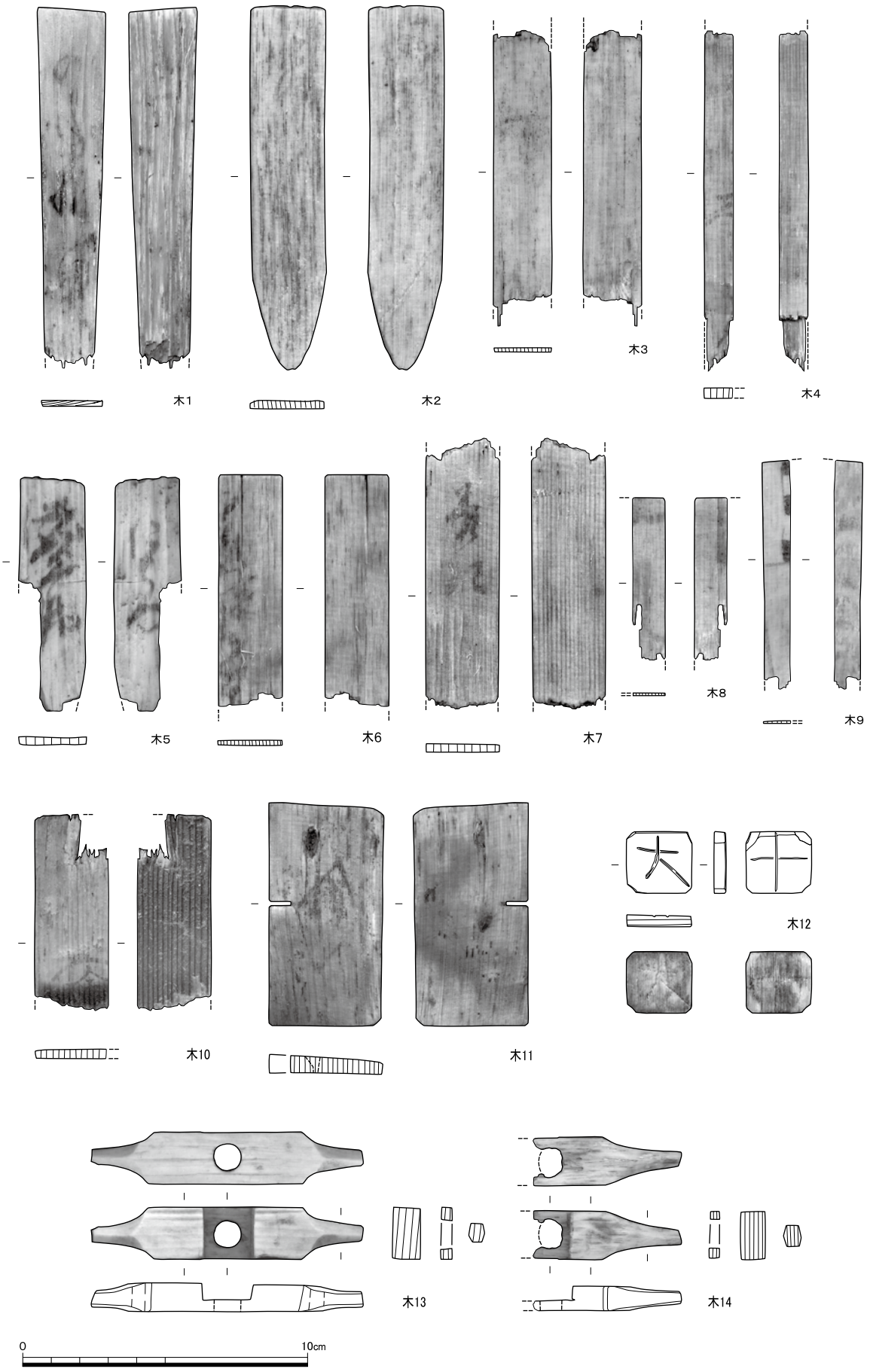




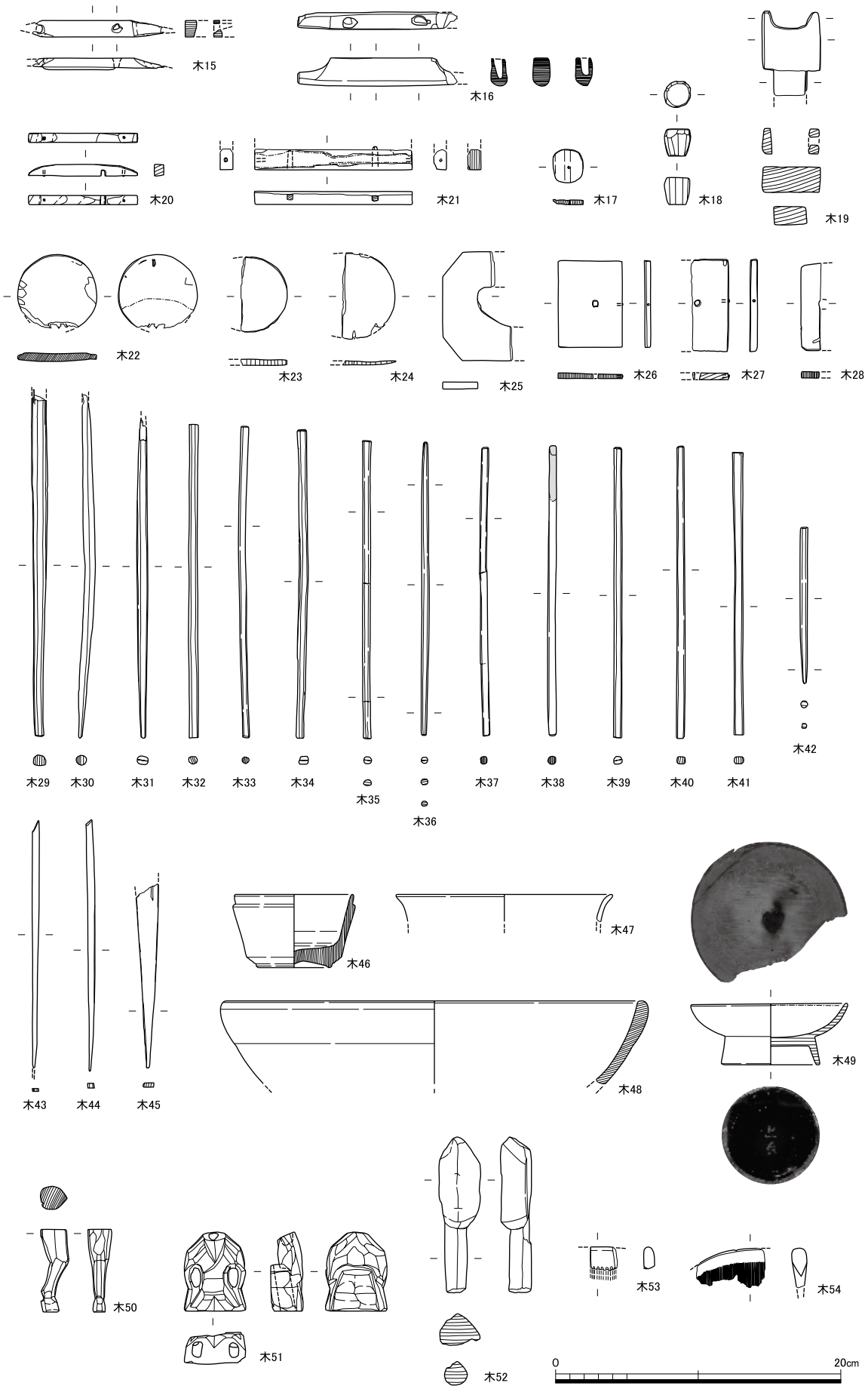
瓦類



土器実測図、瓦拓影及び実測図（１：４）



木製品実測図１（１：２）


木15
木16
木20
木21
木17
木18
木19
木22
木23
木24
木25
木26
木27
木28
木29
木30
木31
木32
木33
木34
木35
木36
木37
木38
木39
木40
木41
木42
木43
木44
木45
木46
木47
木48
木49
木50
木51
木52
木53
木54
0
20cm

木製品実測図２（１：４）

1　Ａ区東調査区全景（北東から）

2　Ａ区西調査区西半全景（東から）

3　Ａ区西調査区東半全景（西から）

1　Ｂ区全景（北東から）

2　Ｂ区南端部全景（北から）

1　C区西半南全景（北から）

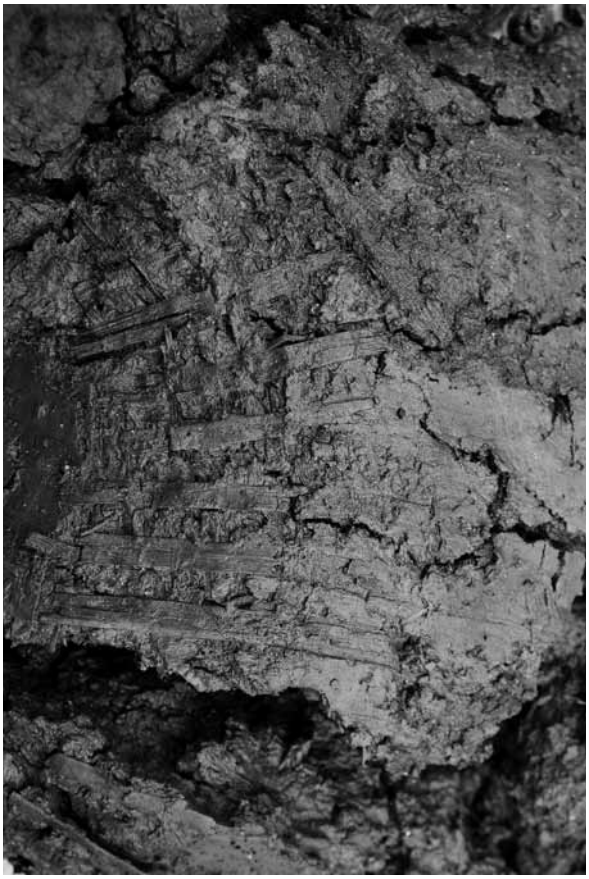
2　C区西半北全景（北から）

1　C区東半全景（南南西から）

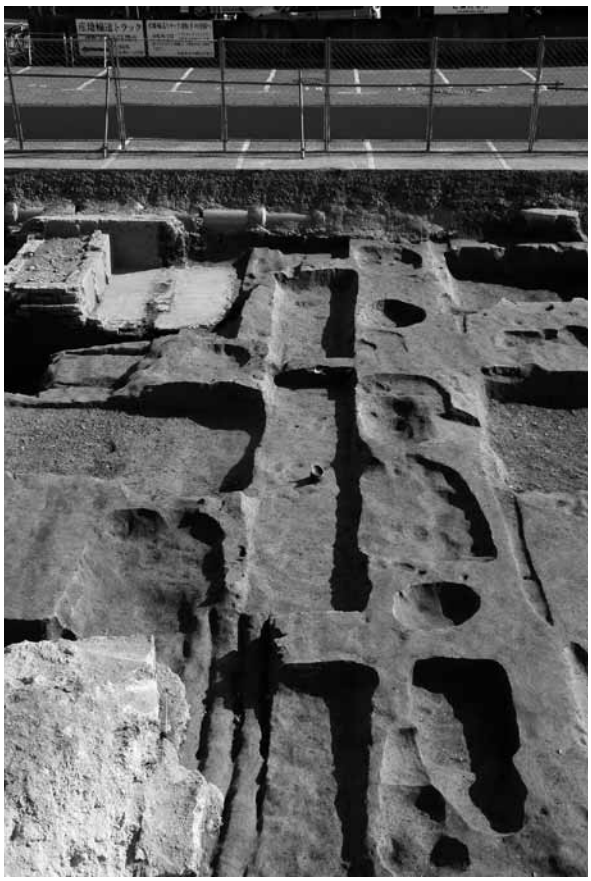
2　C区北端全景（西から）

3　C区濠298（北から）

1　C区濠298（北から）



2　C区濠298出土編籠



3　C区土坑130（西から）

4　C区掘立柱建物1（東から）

1　E区全景（北東から）

2　E区井戸15（北東から）

3　D区西調査区全景（東から）

6

10

12

11

13

14

16

瓦1

瓦3

金1

土器類・瓦類・鉄滓

木46

木51

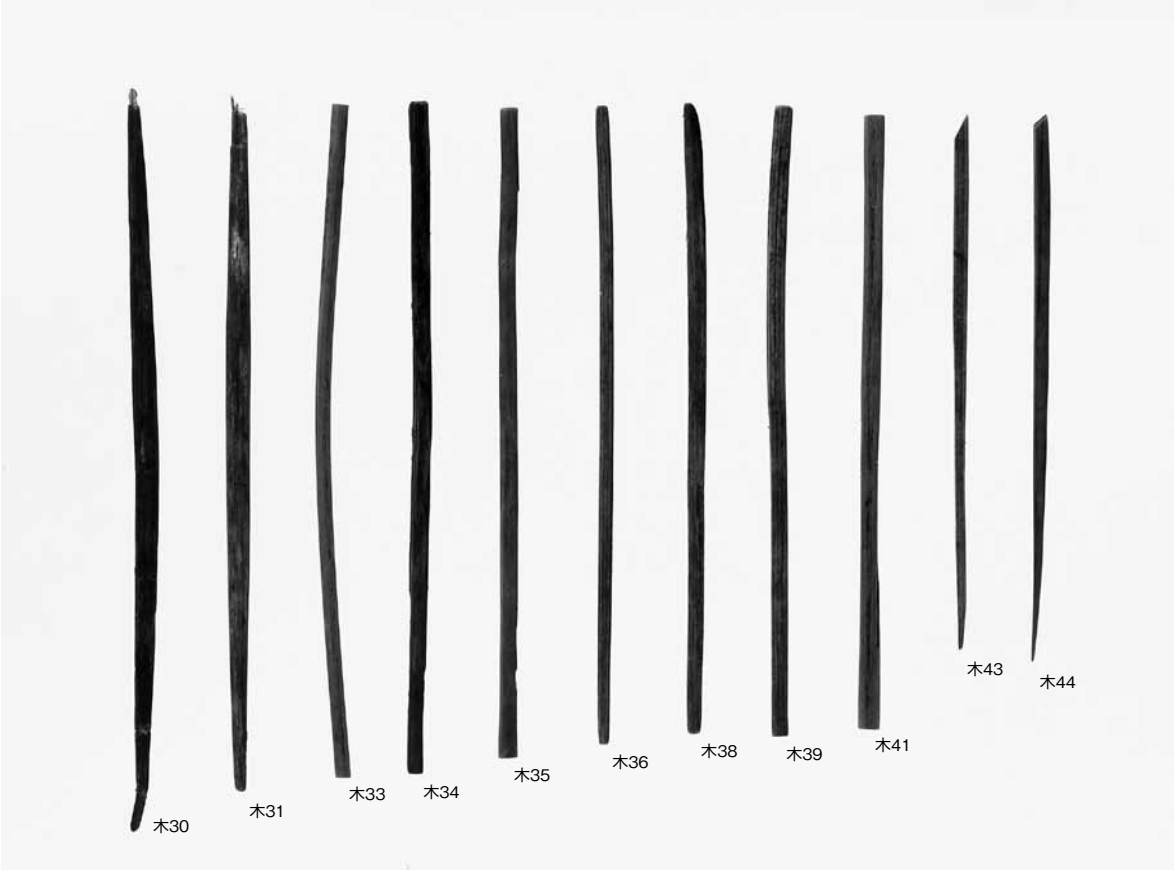
木52

木18

木50

木19

木25



木製品

報　告　書　抄　録

ふりがな	へいあんきょううきょうしちじょういちぼうに・よん・なな・はっちょうあと、おどいあと、どうのくちちょういせき
書名	平安京右京七条一坊二・四・七・八町跡、御土居跡、堂ノ口町遺跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０１７－１３
編著者名	柏田有香・後川恵太郎・金島惠一
編集機関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2018年７月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平安京跡（へいあんきょうあと） 御土居跡（おどいあと） 堂ノ口町遺跡（どうのくちちょういせき）	京都市下京区（きょうとししもぎょうく） 朱雀分木町（すじゃくぶんきちょう）26・38・80番地、 朱雀堂ノ口町（すじゃくどうのくちちょう）20－3	26100	1 149 715	34度59分32秒	135度44分29秒	2016年５月９日～2017年７月27日	4,352㎡	施設整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京跡 御土居跡 堂ノ口町遺跡	都城跡 土塁跡 散布地	平安時代	掘立柱建物、柱穴、土坑、ピット	土師器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、緑釉陶器、黒色土器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類	平安時代の掘立柱建物が見つかった。鎌倉時代の石組井戸が見つかった。御土居の濠が見つかり、木簡を含む多量の木製品が出土した。
		鎌倉時代～室町時代	溝、土坑、井戸、ピット列	土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶椀、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、土製品、瓦類、金属製品、鋳造関係	
		桃山時代	濠	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、瓦類、木製品、金属製品、石製品、動植物遺体	
		江戸時代	溝、土坑、土坑群		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2017-13

平安京右京七条一坊二・四・七・八町跡、御土居跡、堂ノ口町遺跡

発行日　2018年7月31日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　TEL 075-256-0961